



Title	コムソモールと「非公式団体」の対立と協調：ペレストロイカ期コムソモールの変質過程
Author(s)	森, 美矢子
Citation	スラヴ研究, 50, 143-175
Issue Date	2003
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/39013">http://hdl.handle.net/2115/39013</a>
Type	bulletin (article)
File Information	50-005.pdf



[Instructions for use](#)

# コムソモールと「非公式団体」の対立と協調

—ペレストロイカ期コムソモールの変質過程—

森 美矢子

## はじめに

ペレストロイカから連邦崩壊に到るソ連の体制変動を解明する試みが様々になされてきた。最近では「ポスト・ソヴィエト」の政治社会状況をも視野に収めつつ、マーケットエコノミーとグローバリゼーションの観点から旧ソ連（特にロシア）を考察する論考も見られる<sup>1)</sup>。本稿はこうした一連の研究成果に依拠しつつ、コムソモールと「非公式団体」の関係を一つの手掛かりにこの時期を読み解こうとする試みである。

今から約15年ほど前、激動するソ連の現状を象徴する言葉の一つが「非公式団体」であった。ペレストロイカの中で発展しその一翼を担った「非公式団体」は、ソ連研究者ばかりでなく西側のマスメディアにも取り上げられ、ペレストロイカを舞台にした花形役者として一躍注目されるようになった。

しかし、ニュースソースとしての「非公式団体」の出番は多くの場合と同様一過性の現象に過ぎず、一般の関心はすぐに薄れていった。もちろんこうした推移の原因は世間の移り気だけにあるのではなく、ソ連体制の動揺の過程で「公式」と「非公式団体」の境界がどんどん崩れてゆき、「非公式団体」を「非公式団体」足らしめていた体制へのアンチな部分が曖昧になってゆくにつれて、その存在意義が目立たなくなってしまったことが影響している。「非公式団体」のあるものは短期間で消え、あるものは形を変えて存続していった。

他方、コムソモールの歴史はソ連の歴史とほぼ重なっている。コムソモールは青年労働者の革命組織としての系譜を引き継ぎながら、ソ連体制の確立と共に組織の地位を固めていった。30年代は青年大衆の動員組織として重工業化を担い、大祖国戦争では愛国心を鼓舞してパルチザンを組織した。戦後になっても処女地開拓やバイカル・アムール鉄道敷設など大規模な国家プロジェクトを組織的に支え、また学校教育と両輪となって次世代のイデオロギー教化に責任を果たしてきたのである。

しかしながら、コムソモール独自の意思決定や組織行動は20年代末以降極めて制限され、党の指導という原則の下、政治に主体的にかかわる機会はほとんど無かった<sup>2)</sup>。構成員の総

1 ソ連の体制変動研究の分類とその評価については次を参照。M. S. Fish, *Democracy from Scratch: Opposition and Regime in the New Russian Revolution* (Princeton, 1995).

2 ペレストロイカ以前のコムソモールの自律的な活動の可能性を探った数少ない先行研究として、Joel J. Schwartz, “The Young Communist League (1954-1962): A Study of Group Cooperation and Conflict in Soviet Society.” Unpublished Ph.D. dissertation in political science (Indiana University, 1965); David C. Brooker, “The Institutional Autonomy of Soviet Political Groups: A Komsomol Case Study.” Unpublished Ph.D. dissertation in political science (Miami University, 1993).

数や対象年齢層に対する浸透率、組織の資産力はコムソモールの組織力の大きさを示しているが、それに見合った発言力と実質的な存在感があったとはいえない。とはいえ、そのことは直ちに、党が全てを決定する一党支配体制では、コムソモールのような「社会団体」に党の意思を社会に伝達する伝導ベルトとしての役割と、人的リソースの動員以外の活動余地を残さず、組織的主体性と一般青年層の下からのイニシアチブの発露を全く排除していたことを意味するわけではない。しかし、それらが80年代後半に到るまで散発的で例外的であったことは確かである。

ペレストロイカの展開の中で民主化や変革の旗手として表舞台にたち現れた「非公式団体」及び、ソ連体制下において唯一の青年組織として磐石の組織基盤を持っていたものの自律的意思決定力を欠き、官僚主義、活動の形骸化といった非難の矢面に立たされて変革を迫られるようになったコムソモール。本稿の目的はこの両者の活動が交錯する場を考察し、両者の関係が如何に変化してその含意がどのようなものであったかを検討することで、1980年代後半におけるソ連の政治社会の変動過程を解明する手掛かりを得ることにある<sup>3)</sup>。

## 1. 問題の所在

### (1) 両者の関係の含意

次章以下で述べるように、コムソモールと「非公式団体」の関係は、「非公式団体」にコムソモール員を含む多くの青年層がコミットしていたという量的な相関からだけでは評価できない。教育から娯楽活動の提供まで、日常生活に関わる広範囲を活動領域とするコムソモールは、社会のイニシアチブが発現する場である「非公式団体」と、好むと好まざるとにかかわらず接触する機会が多かった。すなわち、社会との接点が多く「非公式団体」の運動を含む、いわゆる、「下から」の動向に直面しやすかったことから、コムソモールは社会変動の動因となりうる高いポテンシャルを持っていたといえるだろう。事実ペレストロイカの進展につれて、コムソモールは様々なイニシアチブや行為の交錯する極めてダイナミックな場となったのである。

コムソモールと「非公式団体」の関係を考察する意義はこの点にある。青年層の意思や行動の発露である「非公式団体」へのコムソモールのコントロールやそれに対する抵抗、あるいは両者の競合、協力、融和などの相互関係を論じることは、ペレストロイカの過程でコムソモールが如何に社会の変化に対処し、どのような活動路線を選択することになったのかを解明するばかりではなく、「下から」の動向と政策としてのペレストロイカの全体像を捉える上で欠くことができない作業であると思われるからである。

さらに強調するならば、政治の中核ではなく日常生活の場に立ち現れる社会変動の要因は、共産党と「非公式団体」の関係においてよりも、コムソモールとの関係においてこそ広く探求しやすいと考えられる。

本稿においては、このような問題意識に基づいて、コムソモールと「非公式団体」の関係

3 1980年代後半のコムソモールの変質過程を「非公式団体」との関係から論じた先駆的研究として、松井康浩「ソ連政治システムの転換と社会団体：コムソモールを中心に」高田和夫編『ペレストロイカ：ソ連・東欧圏の歴史と現在』九州大学出版会、1991年、25-44頁。

を考察対象とする。ペレストロイカの時期のコムソモールと「非公式団体」の関係を直接研究対象とした論考は管見の限りでは見当たらないが、ソルニックの論文の一部がこの時期のコムソモールの変容過程を検討している<sup>4)</sup>。彼によれば、コムソモールは徐々に中央集権的構造から変質し、八月クーデター後の正式な解散宣言を待つまでもなく、事実上活動が各コムソモール組織に委ねられ、全体としての統率が取れなくなっていた。そしてこの組織の遠心化を引き起こしたのは、コムソモール組織の中堅管理者層の意思決定と行動であったと結論付けている。

彼の議論では、コムソモール中堅管理者層が意思決定し、行動を選択する外的環境としての社会情勢の変化は認識されていても、社会の諸勢力がコムソモール中堅幹部に与えた影響力については重視されていない。「非公式団体」のような社会運動がコムソモールの変容過程に主体的にかかわることは想定されていないか、想定されていてもそのフィードバックの効果は些少であると認識されていると思われる。

本稿では公式の組織であったコムソモールと「非公式団体」の相互関係のダイナミズムが、コムソモールの変容とそしてペレストロイカの展開を理解する要素として重要であると考える。コムソモール中堅管理者層の合理的意思決定の連鎖による思いがけない帰結がコムソモールの変容とペレストロイカの結末であると論じたソルニックに対し、「非公式団体」の動向を通して社会の側の潜在的・顕在的影響力、変革への関与とイニシアチブを解明する試みである。

次に、ペレストロイカの時期の若者文化をフィールド・リサーチし、その実態を政治的コンテキストにおいて読み解こうとするピルキントンの著作が、本稿の研究視座の手掛かりとなった<sup>5)</sup>。彼女のフィールド・リサーチは若者のサブカルチャーを対象としているので、政治的言動で当時注目された「非公式団体」は調査の範疇には入っていない。しかし彼女の研究関心はソ連末期のサブカルチャーそのものにあるわけではなく、欧米を中心に構築されたカルチュラル・スタディーズの理論が、社会主義体制から移行しつつあるソ連社会に如何に適用できるのかを検証することにある。それゆえ、大部な著作では、80年代後半までのソ連体制下の青年層に関する言説と政策の変遷が丹念に辿られ、若者のサブカルチャーに関する豊富な知見が提示されている。

しかしピルキントンの著作においては、若者のサブカルチャーの中で「非公式団体」がどのように成立し、それらがソ連体制の権力構造において如何なる位置を占めていたのかがコムソモールの歴史とともに論じられてはいるが、コムソモールも「非公式団体」もそして両者の関係も論考の対象の一部でしかない。そのために、社会変動の場としてのコムソモールが明確には認識されていない。

本稿はこのような先行研究の業績を参照しつつ、「非公式団体」という視座からコムソモールを検討することでソルニックよりも社会の側からのインプットを重視し、青年層の社会的動向をコムソモールとの諸関係に限定することで、ピルキントンのカルチュラル・スタディーズよりも考察対象を狭い政治的文脈に置くことにしたい。

4 Steven L. Solnick, "Growing Pains: Youth Policies and Institutional Collapse in the Former Soviet Union." Unpublished Ph.D. dissertation in political science (Harvard University, 1993).

5 Hilary Pilkington, *Russia's Youth and Its Culture: A Nation's Constructors and Constructed* (London, 1994).

## (2) 「非公式団体」の位置付け

「非公式団体」(неформальные объединения) という用語がソ連のメディアに登場するようになり、学者やコムソモール活動家などの間に定着し始めたのは1986-1987年頃のことである。もちろん、「非公式団体」とこの時期称されるようになった若者のグループや組織は突然生じたわけではなく、コムソモールが公式の唯一の青年組織としての地位を固めていく当時から、その公式の枠からはみ出した実態としては存在していた。

ペレストロイカ以降、スポーツや娯楽の同好クラブやサブカルチャー・サークル、自然保護や慈善活動などを行う社会運動団体、政治的討論や活動を趣旨とする組織など、公式の組織の外で活動する様々な集団を総称して「非公式団体」と一般的に呼ぶようになった。特に体制と相容れない組織に対して「非公式団体」を用い、体制の側から許容できるものについては「自律的集団」(самостоятельные объединения) として区別する場合もあるが、ここでは両者を含めて「非公式団体」の語を用いたい<sup>6)</sup>。

その理由は、両者の境界が時間の経過によって移ろい、区別そのものが曖昧になっていくので、これまでの正統な組織や価値観に収まらない活動を広く「非公式団体」の社会現象として捉えた方が、ペレストロイカによって生じた社会変動のダイナミズムを検討しやすいと思われるからである。

またソ連体制におけるコムソモールの独特な役割を考えた場合、政治組織ばかりでなく文化・娯楽分野において活動する団体を「非公式団体」に包摂することは、コムソモールと「非公式団体」の相関を考察する際に必要なことであろう。ゆえにここで用いられる「非公式団体」の用語は、学術上の定義というよりは、ソ連体制に特有の歴史的な現象に対するものとして用いたい。

当然ながら、これら「非公式団体」の構成員が全て青年層であるわけではなく、そもそも明確な構成員資格を定める組織ばかりではないが、本稿においては青年層のコミットメントが顕著な「非公式団体」をコムソモールとの関係においてのみ考察することにする。

## (3) 対象時期の設定

刻々と情勢の変化する社会変動の時期にあっては、考察対象とする時期をあまり長期にとらず、いくつかに区分した時期を丁寧に検討した後に全体像を構築するのが適当な方法だと思われる。そこで、本稿ではまずコムソモールの変革が本格化しはじめた時期にあたる1987年春頃から1988年前半を対象とすることにした。

本論ではまず「非公式団体」とコムソモールの相互関係をペレストロイカ以前の経過から考察し、その歴史的蓄積を確認する。そしてその後に、両者の関わりがペレストロイカによってどのように展開していったのかを論じたい。中心となる考察時期は、コムソモールの変革の契機となった1987年4月の第20回コムソモール大会から、20回大会の路線を具体化した1987年12月の第2回中央委員会総会を経て、社会全体の民主化の気運が高まった1988年6月の第19回党協議会に到る時期である。

80年代後半に新たな展開を見せるコムソモールと「非公式団体」の関係を明らかにする

6 「非公式団体」の分類については次を参照。Jim Riordan, "Soviet Youth: Pioneers of Change," *Soviet Studies* XL:4 (1988), pp.556-572.



ためには、それまでの両者の関係の蓄積を理解する必要があると思われる。まずコムソモールと「非公式団体」の歴史を概観した後に、第20回コムソモール大会で提示された公式活動路線と「非公式団体」との新しい関係の模索を検討する。さらに、1988年春頃からの第19回党協議会に向けた政治改革議論の盛り上がりの中で、「非公式団体」が果たした役割とコムソモールの対応を検討する。

## 2. コムソモールと「非公式団体」の歴史的相関

### (1) 「非公式団体」の歴史

グラスノスチは歴史の再評価とこれまで隠蔽されてきた社会問題の表面化を急激に生じさせたが、「非公式団体」という語の定着もこの経過と無関係ではない。それ以前、若者の非行グループや反社会的集団に関する教育的社会心理学的見地からの研究が僅かにあったものの、こうした例外を除いて、コムソモール外の青年層の集団や運動が、メディアに取り上げられることや研究対象となることはほとんどなかった<sup>7)</sup>。

1987年、トビリシの映画祭でラトビアのドキュメンタリー「若いことは楽か?」が大賞を受賞した。ロック・ミュージックなどサブカルチャーに浸る若者の姿やフーリガンら未成年犯罪の実態を赤裸々に映したこの映画は、これまで封印されてきた若者の社会問題を衝撃的に世間に暴露したのである。この頃から、若者の「非公式団体」の存在と用語が広く認知されるようになったといえるだろう。

それと同時に、歴史の再評価の過程で、コムソモールの陰で無視されてきた青年運動や組織にスポットライトが当てられるようになった。革命前後から1920年代半ばにコムソモールが唯一の青年組織としての足場を固めるまで、青年労働者運動の他にどのような青年運動が存在しそれらがどのように消滅していったのかは、コムソモールが成立し大衆組織に成長した歴史に故意に埋没させられていたが、80年代後半になってコムソモール確立期のライバルについて徐々に研究が始まったのである<sup>8)</sup>。

これまでの研究が明らかにしたところによると、革命以前から活動していたYMCAの流れを汲む青年宗教組織やセツルメント活動、ボーイスカウトなどは、そのブルジョア的価値観によってソ連当局によって20年代半ばまでに解散させられたが、彼らの活動地盤が一挙に消滅することはなく、その後も若者を局地的に組織する場合があった<sup>9)</sup>。しかし、こうした若者の娯楽組織や啓蒙活動に対してコムソモールは敵対するばかりではなく、時にはこうした小さな組織をそのままコムソモールの核として引き継ぐことも試みられた。一握りの青年革命家の集団から普通の労働者や農民を組織員にしていこうとするコムソモールにとって、平時の若者をひきつける活動で一日の長があるこうした「非公式団体」の存在は無視し得なかったのである。

7 比較的早い段階から「文学新聞」の記者シチュコチーヒンが「非公式団体」について書いていた。例としてЩекочихин Ю. Алло, Мы вас слышим // Литературная газета. 8 апреля 1987.

8 Рожков А.Ю. Молодой человек 20-х годов: протест и девиантное поведение // Социологические исследования. 1999. №7.

9 Соколов В.И. Из истории молодежного движения в россии (1900-1926 гг.) // Социологические исследования. 1996. №12. С.122-125.

ソ連体制とコムソモールに不満を持つ若者の政治的集団の存在は、20年代半ば過ぎまでその事例が報告されている。これらの集団は小規模で散発的であり、全国的に系統だった反コムソモール運動があったわけではなかったが、党内抗争がコムソモール内部にも波及し除名や脱退が広く見られた当時、反体制的青年運動がコムソモールの脅かすようになる危険性にコムソモールが全く鈍感であったはずがなかった。コムソモールは「非公式団体」と対立や融和をしつつ若者の政治的抵抗を抑えて文化・娯楽活動の主導権を握り、唯一の青年組織として確立していった<sup>10)</sup>。

20年代末の上からの革命は、コムソモールの体制内の地位を最終的に決定し、大祖国戦争後まで「非公式団体」の存在と活動はほとんど表面化することはなかった。戦後の復興を経て国民全体の生活水準が向上し、再び若者の「非公式団体」が登場する経済的・社会的ゆとりがソ連社会に生じたのは、「雪どけ」の時期である1950年代半ばを過ぎてからだった。

この時期は西側の音楽やファッションなど若者の大衆文化がソ連に流入し始め、それらを模倣した若者のグループが新たな「非公式団体」として現れた。奇抜なファッションと行動で目立ちたがる都会の若者たちのグループは当時スティリャーギと呼ばれるようになったが、1920年代が「非公式団体」とコムソモールの関係の第一期とするならば、スティリャーギのような「非公式団体」が新たな社会現象として認知されるようになった1950年代後半から60年代を第二期とするところができるだろう<sup>11)</sup>。「アマチュア歌唱クラブ」や「学生自然保護レンジャー」運動などペレストロイカの時期にみられた様々な「非公式団体」の源流はこの時期まで遡ることができる。

またこの時期はコムソモールが「非公式団体」への組織的アプローチを探り始めた時期でもある。ブルジョア文化の残滓を一掃し社会主義的価値観を次世代に教化するための闘争を「非公式団体」相手に戦った20年代とは異なり、コムソモールは戦後10年を経てすでに大衆組織として磐石の組織基盤を持ち、イデオロギー的正統性を手中に収めていた。それにも拘らず、若者たちがコムソモールの組織の外で「非公式団体」にかかわることは、その活動自体に反ソ的な政治色がなかったにしても、潜在的にはコムソモールとソ連体制への挑戦・抵抗を意味していたのである。

それゆえ、コムソモールは唯一の青年組織として若者の娯楽や余暇・社会活動に介入し、「非公式団体」の取り込みとコントロールに取り組むことになった。これはコムソモールにとって新たな課題であり、コムソモール員によるパトロールや反「スティリャーギ」キャンペーンによってブルジョア的消費主義を批判するだけでなく、文化宮殿やコムソモールの催しで望ましい文化活動を積極的にアピールするなど、コムソモールの活動領域が拡大することになったのである。このようにして、青年層の余暇や文化に対するコムソモールの政策的関与、「非公式団体」との対立・融和などの相互関係は、50年代後半頃から徐々に築かれつつあった。

10 この過程については次を参照。松井康浩『ソ連政治秩序と青年組織』九州大学出版会、1999年；Anne E. Gorsuch, *Youth in Revolutionary Russia: Enthusiasts, Bohemians, Delinquents* (Indiana, 2000)。

11 一般的にどの研究者もほぼこの時代区分に沿っている。ソ連の研究者の例として、Сундиев И.Ю. Самодельные объединения молодежи // Социологические исследования. 1989. №2. 外国研究者の例として、Pilkington, *Russia's Youth and Its Culture*.

その後60年末から70年代初めになると、西側のサブカルチャーの隆盛に影響を受けた新しい「非公式団体」が現れた。モスクワ、レニングラード、キエフ、リボフなど大都市には、ヒッピーのコミュニオンが作られ、アマチュア・ロックバンドが活動するようになった<sup>12)</sup>。この時期がその前の時期と大きく異なる点は、「非公式団体」が一般大衆に飛躍的に普及し日常生活に深く浸透したことである。生活水準の向上が、自分の部屋のラジオで西側のロック・ミュージックを聴き、それをテープに録音して仲間内で楽しむというライフスタイルを可能にしたのである。その結果、余暇は「文化の家」やコムソモールの活動に参加するのではなく、プライベートな空間で「非公式団体」の内輪の仲間ですごすことが若者の間でますます普通になり、趣味のアマチュア・グループの公的な機関の外の集まりが彼らの娯楽の中心となったのである。

1970年代には様々な志向をもつ大小様々な「非公式団体」が若者の中で見られた。ヒッピーやパンクを代表とするサブカルチャーに傾倒する集団の周辺には、西側や国産ロックを演奏するアマチュア・グループとそれを聞きに集まる人々が緩やかに連帯し、その外側には「学生自然保護レンジャー」運動のような少数の社会活動団体が存在していた。そして最も周辺の位置に政治的「非公式団体」がごくわずかながら活動していたのである。

## (2) 現代への連続性

このような見取り図をもとに、この時期の「非公式団体」の特徴をその政治的関心度の低さ、個人的な関心への内向きな態度に求めることは可能であるが、社会問題に背を向けて共通の趣味や娯楽のために集まる集団と、社会問題に積極的に関与して政治的発言をする80年代後半の「非公式団体」の境界は実際にはかなり曖昧であり、前者から後者への発展は決して特異なものではなかった。当時の「非公式団体」運動の歴史的蓄積が80年代後半ペレストロイカの時期になって、政治的・社会的に華々しい「非公式団体」の開花につながったことを看過すべきではないだろう<sup>13)</sup>。

他方、この時期は、「文化の家」を全ての地区に設立しそこで地区の文化啓蒙政策を一元的に行う計画が立てられた<sup>14)</sup>。またイデオロギー教育や文化活動に関する決定が山のように採択されている。この路線を見る限り、青年層の余暇をコムソモールなど公的組織がきちんと管理し、「非公式団体」のような逸脱を蔓延させないというのが公式のスタンスであったと思われる。しかし実際は「文化の家」の設立は計画通りに進まず、決定の中身を見ても、具体的改善策が提示されていることよりも、同じような問題点が繰り返し指摘されていることのほうが多かった。

このように「非公式団体」の青年層への浸潤をコムソモールは決して容認していたわけではなかったが、実のところはある程度現実を放任していたことも否定できない。若者の日常生活に入り込む点で「非公式団体」はイデオロギー的に好ましくないやっかいな現象である

12 Сундиев. Самодельные объединения молодежи. С.59.

13 ペレストロイカ以前の非政治的「非公式団体」とペレストロイカ後の「非公式団体」の連続性に注目する研究として、Jim Riordan, "Teenage Gangs, 'Afgantsy' and Neofascists," in Jim Riordan, ed., *Soviet Youth Culture* (London, 1989), p.139; Anne White, *De-Stalinization and the House of Culture Declining State Control over Leisure in the USSR, Poland and Hungary, 1953-89* (London, 1990), pp.85-88.

14 White, *De-Stalinization and the House of Culture*, p.39.



が、即座にソ連体制を揺るがすほどの打撃を与えるものでもなく、当時はある程度の放任が許されるくらいの余裕が当局の側にあったといえるだろう。

それと同時に、「非公式団体」の合法化と引き換えにした活動への介入がなされていたのも事実である<sup>(15)</sup>。1968年以降活動を禁止されていたモスクワの「アマチュア歌唱クラブ」に対しモスクワ大学コムソモール委員会の側が協力関係を提案し、1974年の第15回集会はモスクワ大学のコムソモールと党組織の協賛によって開催された。そして、その代価としてクラブの指導部から「異論派」と目される人物が締め出されることとなったのである。放置と介入という当局の中途半端な対応を象徴するかのようには、「非公式団体」が青年層の日常生活に広がっていくのと反比例して「非公式団体」に関する公式の発言はメディアから消えていった。

しかし、この状況を一変させたのが国際状況の緊張であった。70年代末から80年代初めの米ソ関係の悪化によって、青年層とイデオロギーの問題が現実的政策課題として浮上したのである。アフガニスタン侵攻によって西側との対立が高まると、軍事衝突以前に心理戦争の脅威を実感するようになった当局は、若者が西側の流行や大衆文化に接触し感化されることに神経質になった<sup>(16)</sup>。そこで改めてコムソモールが、「非公式団体」と若者の余暇の問題に本腰を入れて取り組まざるを得なくなったのである。

特に取り締りの対象となったのが、ロック・ミュージックを中心とした西側ポピュラー音楽であり、アマチュアのロック・グループと無許可の音楽が流れるディスコが主なイデオロギー闘争の場となった。1980年の文化省とコムソモール共同決定および文化省通達は、ディスコに対する初めての本格的規制であった<sup>(17)</sup>。各地区にディスコを統括する組織を作り、そこで器材やレコードの提供、演奏曲目の決定を一括して行うことになったのである。そして83年6月の共産党中央委員会総会後はさらにアマチュア芸術グループ全体に対する規制が強化され、85年までにアマチュア・グループの全国的査察が行われることになった<sup>(18)</sup>。

1984年には録音・演奏を禁止する曲目リストが作られるまでに音楽活動の制限が厳しくなったが<sup>(19)</sup>、禁止すればするほど青年層の心理は逆に離反していくのが事実であった。イデ

---

15 1959年に第一回の全国フェスティバルを開催した「歌唱アマチュアクラブ」は各地の大学を中心に数を増やし、60年代末のフェスティバルには23組織が参加するまでに成長したが1968年3月のフェスティバルにアレクサンドル・ガリーチを招待したことから当局の批判を受け、モスクワのクラブは活動禁止となっていた。Неформальная Россия о неформальных политизированных движениях и группах в РСФСР. М., 1990. С.265.

16 西側の大衆文化や宣伝に青年が触れることを警戒する当局の対応については、Pilkington, *Russia's Youth and Its Culture*, pp.80-81.コムソモールの承認を得ていた「アマチュア歌唱クラブ」は、1980年の全国フェスティバルを中止にされ、81年にはモスクワのクラブの活動が禁止された。Неформальная Россия. С.268.

17 White, *De-Stalinization and the House of Culture*, pp.74-77.

18 О проведении всесоюзного смотра самодеятельного художественного творчества, посвященного 40-летию победы советского народа в великой отечественной войне. Постановление Коллегии Министерства культуры СССР, Бюро ЦК ВЛКСМ 28 июля 1983 года // Документы ЦК ВЛКСМ 1983. М., 1984. С.61-65.

19 演奏禁止リストの曲目数に資料によって違いが見られる。カガルリツキーは西側の曲73曲、国内の曲37曲と記述。他方クレチマルは、西側68曲、国内38曲としている。Boris Kagarlitsky, "The Intelligentsia and the Changes," *New Left Review* 164 (1987), p.17; *Крепчмар Д.* Политика и культура при Брежнев, Андропове, Черненко: 1970-1985 гг. М., 1997. С.186.

オロギー関係者の苛立ちはコムソモール批判となって現れた。84年7月7日決定はコムソモール中央委員会を批判し、文化人からは若者文化とそれを放置するコムソモールの対応に不満が相次いだ。特にモスコフスキー・コムソモーレツ紙の記事が商業主義的で西側大衆文化を宣伝していると槍玉にあげられた<sup>(20)</sup>。

もちろん、コムソモールは西側大衆文化の流入とアマチュア青年グループをただ放置していたわけではなかった。イデオロギー闘争の一環として健全なアマチュアグループを積極的に育成するために、一部のコムソモール組織では、場所や資材を提供し活動の自由をある程度譲歩するのと引き換えに、「非公式団体」をコムソモールの管理下におくことが試みられたのである<sup>(21)</sup>。これまでのように、活動を全面的に禁止するかそうでない場合にも監視と抑圧が主であったコムソモールの組織的対応が、望ましい「非公式団体」の積極的育成と宥和的アプローチに方向転換しつつあった兆候といえるだろう。

しかし、自発的に作られた「非公式団体」と接触する伝手も、彼らと対話する経験や知識も、コムソモール・カードルには絶対的に不足していた。しかしながら、イデオロギー保守派の危惧をよそに、コムソモール・カードルは「非公式団体」に心情的に共感できる若い世代でもあった<sup>(22)</sup>。ペレストロイカ直前の1980年代前半に青年層のイデオロギー教育が政治問題化したことは、コムソモールが「非公式団体」に対する新しいアプローチを模索する契機となったのである

### 3. 第20回コムソモール大会と「非公式団体」の新展開

#### (1) 余暇の組織化

1980年代初期コムソモールが積極的に若者の余暇に関与し始めたことは、コムソモールが「非公式団体」に本格的に向き合う下地になったといえるだろう。しかしそれはあくまでもイデオロギー闘争の一環としての一方策であった。ペレストロイカが始まって当初はその路線は変わらなかった。

1985年12月24日のコムソモール中央委員会ビューロー決定では、アマチュア青年グループの活動に無分別なブルジョア大衆文化の模倣や消費主義的傾向が現れないようにグループのリーダーを直接コントロールすることが必要であり、しかしそうした仕事に長けたコムソモール・カードルが不足していることが指摘された。そこでこの時期から、「非公式団体」に対抗しうる文化・娯楽関係職員の質を向上させ、文化娯楽施設の充実改善をはかることが課題とされたのである<sup>(23)</sup>。

20 この時期の反ロック・ミュージック・キャンペーンについては Paul Easton, "The Rock Music Community," in Jim Riordan ed., *Soviet Youth Culture*, pp.56-58.

21 О работе комитетов комсомола города Ростова-на-дону с самостоятельными объединениями молодежи в свете постановления ЦК КПОО «О дальнейшем улучшении партийного руководства комсомолом и повышении его роли в коммунистическом воспитании молодежи». Постановление Бюро ЦК ВЛКСМ 24 декабря 1985 года // Документы ЦК ВЛКСМ 1985. М., 1986. С.94-97.

22 コムソモールの末端組織が主催のコンサートにロック・グループを呼ぶことなどは珍しいことではなかった。

23 Правда. 16 июня 1985.

まず第一に、予算配分の少ない文化娯楽施設では若者の要求する娯楽を提供するにはどうしても限界があるので、料金や会費を徴収してでも活動内容を魅力的なものにすることが検討され始めた。次にコムソモールと文化施設の連携が進められ、人材の確保のために文化スポーツ施設職員の身分保障の改善が議論されるようになった<sup>(24)</sup>。

そしてこの路線を発展させるものとして、「青年文化センター」の設立が決定された<sup>(25)</sup>。この決定により、1986年中に各市と地区に既存の文化宮殿や労働組合クラブを基盤に「青年文化センター」を設立し、運営の中心はコムソモールが担うこととなった。そしてスポーツや趣味のアマチュア・グループをセンター内に積極的に組織するために、センター・スタッフには特別な組織準備要員が設けられたのである。しかし、問題はやはり資金不足であり、センターの利用や催しで料金を徴収し、それをアマチュア・グループの活動費用に当てることが認められた。

そして同じ時期に、「非公式団体」とコムソモールの関係を根本的に変化させる政策が策定された。公的施設にアマチュア青年グループの活動の場を設けることからさらに踏み込み、これまで公的組織外で自発的に活動してきた団体を公的組織に登録させ、自主組織として制度内に取り込む方針が決定されたのである<sup>(26)</sup>。この決定によれば、非公式に活動するアマチュア組織は文化施設やコムソモールなどに登録することにより、正式に認知された自主組織として活動することが保障されることになった。このことは当局が「非公式団体」の存在を公に認めたことを意味し、「非公式団体」への歩み寄りと同時にそれらの選別が行われることになったのである。

1986年7月の決定はコムソモールにとっても大きな意味を持っていた。この5年間で自発的に結成されたアマチュア・グループの数は1.5倍に増加し、活動に参加する青年の数は250万人から600万人以上に達し、ますます「非公式団体」の蔓延を警戒するコムソモールにとって、「非公式団体」を認知し制度内に取り込むこの正式な路線決定は、青年層への影響力行使をめぐって「非公式団体」と対抗・協力する場の飛躍的な拡大をもたらす画期的な路線変更であったのである<sup>(27)</sup>。

しかし、「非公式団体」に登録させる決定が採択された後も、アマチュア・グループが登録を求めても拒否される場合や、登録が受理されても登録先からの支援が受けられず、「非公式団体」にしてみれば活動環境の改善が期待はずれに終わることが多かった。例えば、モスクワ市執行委員会文化部に登録した「ソコーリニキ」は文学・演劇・絵画の三部門を持つ芸術団体で、活動歴が長くこの決定の準備作業にも加わった有力団体だったが、絵画の販売

24 О работе комитетов комсомола саратовской области по повышению эффективности использования клубных учреждений и спортивных сооружений в организации досуга молодежи. Постановление Секретариата ЦК ВЛКСМ 8 апреля 1986 года // Документы ЦК ВЛКСМ 1986. М., 1987. С.162-169. 文化施設のスタッフに経験と専門知識が不足し身分が不安定なために流動性が高く、文化啓蒙活動が停滞していることについては、White, *De-Stalinisation and the House of Culture*, pp.117-123.

25 О создании городских районных молодежных культурных центров. Постановление Секретариата ЦК ВЛКСМ 28 мая 1986 года // Документы ЦК ВЛКСМ 1986. С.176-180.

26 О дальнейшем развитии и совершенствовании работы любительских объединений и клубов по интересам. Постановление Коллегии Министерства культуры СССР, Секретариата ЦК ВЛКСМ 2 июля 1986 года // Документы ЦК ВЛКСМ 1986. С.200-207.

27コムソモールは「非公式団体」を相手に本格的に青年の余暇の組織化に取り組むため、コムソモール活動家の研修制度を整えた。Молодой коммунист.1987. №4. С.108.

や公演などで年間3万9千ルーブリの収入があり資金の不安がないにもかかわらず、登録後も自前の活動場所を借り受ける契約は成立しなかった<sup>(28)</sup>。実際には「ソコーリニキ」のように資金が潤沢な例は稀で、ほとんどのアマチュア・グループは会費だけで運営されていた。決定後は登録先機関から資金援助を受けることが文面上可能となったが、登録先機関の義務ではなかったので実際に援助を受けるのは難しかったと考えられる。

結局、登録先機関の消極的対応や束縛を避けようとするアマチュア・グループの思惑から、決定採択後も公的組織の外で活動を続けるグループが多かった。モスクワ市コムソモール委員会は長年フーリガン行為で当局を悩ませたサッカーファンのグループに、コムソモールに登録して公式のファンクラブとして活動することを働きかけたが失敗したのが典型である<sup>(29)</sup>。

その一方でコムソモールでは、コムソモール委員会に直接「非公式団体」に登録させる方法とは別に、「非公式団体」受け入れのための別組織を設立する方法が採られる場合もあった。レニングラードでは、市コムソモール委員会が「非公式団体」の支援活動をする拠点として「レニングラード創造的イニシアチブ・センター」を設立し、センター代表には市コムソモール委員会非公式団体部部长セルゲイ・ピラトフが就任した<sup>(30)</sup>。センターはコムソモールの経路を利用して加入団体と公的機関の折衝を仲介し、許可の取得や物資・情報の提供など側面から「非公式団体」の活動を支援した。センターの活動資金は当初こそコムソモールの持ち出しとコンサートや展覧会収入を期待できる芸術グループのセンター維持費で賄われていたが、1988年頃には各加盟団体が独立採算で運営されるまでに活動が安定したのである。

このような大都市の実験的試みは必ずしも最初からコムソモール中央の方針に沿って始まったわけではなく、地方組織の独自のイニシアチブに拠るところが大きかった。その後、徐々に他の地域のコムソモール委員会がうまく稼働している試みを模倣受容していく過程で、中央委員会の支持と全般的な活動規定が後追いするように固まっていったのである。

ノボシビルスクで1986年はじめに創設された「青年イニシアチブ・フォンド」はその最たる例といえよう。地元の科学者ゲンナジ・アルフレンコの提唱した活動を市コムソモール委員会が支援して始まった「青年イニシアチブ・フォンド」は、全国で250を数えるまでに普及した<sup>(31)</sup>。このフォンドの趣旨は青年の芸術や文化団体の活動を支援することであり、ノボシビルスク市コムソモール委員会はその設立根拠を10年前の党決定「創造的若者との活動について」に求めている。しかしコムソモールの出資と加入団体からの会費を資本として法人を設立し、地元のコムソモールが運営するという形態は先例の無いものであった。

フォンドは当局が難色を示していたポスター・アーティストの展覧会を実現にこぎつけるなど交渉事をするだけでなく、小切手での原材料購入に苦労している実験的演劇集団に、制作費用を現金で貸与するなど資金面での支援も行い、86年末までには、ジャズ演奏家の演奏機会の確保や若手詩人の自費出版援助などその他の実績もあげていた<sup>(32)</sup>。

28 Никто не хотел отдыхать // Московские новости. 1987. №19.

29 «Гомо номо» ждут внимания // Молодой коммунист. 1986. №12. С.28.

30 このセンターには若手芸術家グループや、歴史建造物保護運動組織「スバセーニエ」、スターリニズムの犠牲者追悼団体「メモリアル」、エコロジー団体「デリタ」などが加入した。Неформальная россия. С.360.

31 Anne White, "Charity, Self-help and Politics in Russia, 1985-91," *Europe-Asia Studies* 45:5 (1993), pp.787-810.

32 Таланты надо помогать // Молодой коммунист. 1986. №12. С.64-72.



モスクワとレニングラードに設立された「ロック・ラボラトリー」もまた、コムソモールによる「非公式団体」の取り込みの一形態であった<sup>(33)</sup>。ラボラトリーではこれまで「非公式団体」として活動してきたアマチュア・ロックバンドに練習機会を保障し、彼らが地下活動ではなく、公式に録音・演奏をできるようにした。その結果、闇経済からレコードやコンサートチケットの販売収入を奪うという副作用をもたらし、同時にコムソモールが組織の資金をいかなる根拠で他の組織に使うことができるのか、コムソモールが若者に娯楽やサービスを提供する場合、利潤をどの程度見込んでもいいのかといった「コムソモールと金」という新しい問題が生じ始めたのである。

「青年イニシアチブ・フォンド」や「ロック・ラボラトリー」の活動が示すように、コムソモールが積極的に青年の余暇活動に関与し文化や娯楽の「非公式団体」との接触が深まるにつれ、この問題は避けて通れなくなっていく。

## (2) ペレストロイカと新しい「非公式団体」の誕生

コムソモールの「非公式団体」への接近と宥和路線は、その出発点はあくまでもイデオロギー的統制手段の一環であり、すべての「非公式団体」と無条件に協調関係を結ぶものではなかった。しかし、ペレストロイカの深化は社会の自由度を高め、「非公式団体」の活動できる空間を飛躍的に拡大していったのである。若者のサブカルチャーを代表するロック・ミュージックの認知はその象徴であった。

人気ロックバンド「アクアリウム」はペレストロイカ以前活動を妨害され、リーダーであるボリス・グレベンシチコフはバンド活動を理由にコムソモールを除名され職を解雇されたが、1986年になってテレビ出演が解禁され、イデオロギー闘争の一環として作成された演奏・録音禁止リストも、廃止はされなかったものの適用はされなくなっていった<sup>(34)</sup>。

これまで違法、あるいは半違法とみなされてきた組織や活動が公に認知されていくにつれて、社会問題の解決のために運動を展開し、あるいは積極的に政治的発言をする新しい「非公式団体」が表舞台に登場するようになった。こうした「非公式団体」はその政治的志向と社会革新を目指す行動力によって、若者の文化や娯楽の分野でいわば「内向き」に私的に活動していた「非公式団体」と質的に異なる印象を与える。しかし、政治的「非公式団体」の代表的活動家であるカガルリツキーが述べているように、彼のような若い政治活動家は若者のサブカルチャー・グループの周辺に集い、同好会活動から政治社会活動に関心を広げる「非公式団体」は稀ではなかった<sup>(35)</sup>。娯楽・文化の分野の「非公式団体」と政治社会運動の「非公式団体」の境界はかなり曖昧であり、両者のメンバーが重複することも一般的であったのである。

そして1986年頃になると、若者の社会運動が「非公式団体」に対する世間の評価を変えることになった。かつては若者の消費主義の現われと非難され、西側の大衆文化の模倣に過

33 モスクワの「ロック・ラボラトリー」の活動について。Комсомольская правда. 23 октября 1988. 同様の組織はリガにも作られた。В ожидании третьей волны // Молодой коммунист. 1987. №1.

34 1987年にはヘビーメタル・ロックを愛好する「メタリスト」と称されるグループが、「非公式団体」の登録制度によって、モスクワのセバストポリ地区コムソモールに初めて登録された。

35 Kagarlitsky, "The Intelligentsia and the Changes," p.19.



ぎない反社会的な存在と全般的にみなされていた「非公式団体」が、社会の変革の担い手として脚光を浴びるようになったのである。その先駆的例となったのが、モスクワの大学生を中心とした歴史建造物保護団体「スラバダ」である<sup>(36)</sup>。彼らはキリル・パルフェノフを中心に、86年7月から約2ヶ月間17世紀の建造物シチェルバコフ宮殿を占拠して、その取り壊しの決定に反対した。その後、宮殿の保存が決まると自主的に修復保存活動に関わり、その社会的イニシアチブはペレストロイカがもたらした新しい現象として注目されたのである。

同様の「非公式団体」の運動はレニングラードでも始まった。1986年9月に結成された「スパセーニエ」は、87年3月に同じく取り壊しの決まったホテル「アングルテール」の保存を訴えてピケを張り当局と衝突したが、この時「スパセーニエ」のリーダーであるアレクセイ・コワリョフの身柄の拘束に反対し、「スパセーニエ」の弁明に奔走したのが、市コムソモール委員会付属の「創造的イニシアチブ・センター」であった<sup>(37)</sup>。

「スパセーニエ」のピケの後レニングラードとモスクワでは臨時的デモ規制が敷かれ、レニングラードでは「スパセーニエ」を中心にデモ自由化運動が行われた。「スパセーニエ」がけん引役を果たし、またコムソモールとの協力連携体制が比較的整っていたこともあり、レニングラードでは「非公式団体」が徐々に市政に発言し、社会問題の解決に実務的に関わるようになったのである<sup>(38)</sup>。

他方、モスクワでもペレストロイカを支持し、政治社会の改革のために発言するグループが活動し始めた。若手の学者や学生らを中心にしたグループは、当初は内輪のディスカッションサークルのような形態から出発し、その後社会に向けて発言して外部との協調行動を目指すようになる。その先駆けとなったのは1986年後半から87年初めにかけて結成された「民主的ペレストロイカ」と「社会的イニシアチブ・クラブ」である。

前者は中央経済数理研究所の若手研究者が集まり時事問題を議論する場から始まり、後者は「コムソモリスカヤ・プラウダ」の読者の手紙を分析する社会学者らの集まりが発端であった<sup>(39)</sup>。これらの「非公式団体」は民主化の推進について積極的に議論し発言することを目指していた。1987年1月の共産党中央委員会総会以降政治改革への期待が高まり「非公式団体」の運動が活発化し始めた中で、コムソモールは第20回大会を迎えることになった。

1987年4月の20回大会でコムソモールは規約を改正し、末端組織の活動の自由を拡大して組織の活性化を図るつもりであった。この問題をめぐっては1986年末から大会開催まで、「非公式団体」が積極的に発言したばかりでなく、その存在と活動がコムソモールのネガティブな姿を浮かび上がらせ、規約の改正論議はコムソモールの直面する根源的問題へとしばしば展開した。「どのようなコムソモールが必要なのか。」「なぜコムソモールが必要なのか。」「青年層のための組織とはどんなものなのか。」「非公式団体」はコムソモールが答えなければならぬこうした問いについて、常に参照されるオルタナティブな存在になったのである。

36 Неформальная россия. С.325.

37 Неформальная россия. С.370.

38 A. Duka, N. Kornev, V. Vorjnov and E. Zdravomyslova, "The Protest Cycle of Perestroika: The Case of Leningrad," *International Sociology* 10:1 (1995), pp.83-100.

39 Неформальная россия. С.246-247, 263.

趣味や関心を共有する仲間同士の「非公式団体」で余暇を過ごす青年たちにとって、自分達青年の利益追求とひいては社会改革を正面に掲げる「非公式団体」の方がコムソモールよりも共感できる対象であったとしても不思議ではない。コムソモールはあまりに自分達の生活からかけ離れた空虚な存在に過ぎないと思われていたのである。「非公式団体」はコムソモールが指導し場合によっては禁止する対象から、青年層への影響力を争うコムソモールの対抗馬に成長しつつあったといえるだろう<sup>(40)</sup>。ペレストロイカの始まりによってコムソモール自身が組織改革を迫られる過程で、「非公式団体」は無視できない主体としてコムソモールに否応なしに関わってくることになる。その最初の公式の場が第20回コムソモール大会だった。

### (3) 第20回コムソモール大会の議論

20回大会直前コムソモール上級学校科学調査センター長のイリンスキーは、「非公式団体の存在はコムソモールにとって不面目なだけではなく、コムソモールに対する挑戦である。」と述べた<sup>(41)</sup>。たとえコムソモールが「非公式団体」を登録によって組織の下に置いたとしても、社会や青年層に対する影響力・発言力を考えた場合、組織の大小で単純にコムソモールと「非公式団体」の優劣をつけることはできなくなりつつあった。両者の主と従の関係が揺らぎ始めたことは、大会前のコムソモール指導部に戸惑いを与えたことだろう。

1987年3月に開かれたモスクワ大学のコムソモール協議会では、「『非公式団体』の指導者をコムソモール組織に代表として加えることが適当である」との一文が決議に盛り込まれた。同協議会では一部の学生から、末端組織を今のような職場や学校単位だけではなく、同じ関心や利害関係を持つ集団も組織単位として可能にすべきであるという提案が出された。結局この提案は採択されなかったが、「非公式団体」のようにメンバーが目的を共有すればこそ組織がメンバーに必要とされ活性化されるという意見は、大会前の規約改正議論の後も繰り返し聞かれることになる<sup>(42)</sup>。

第20回コムソモール大会はビクトル・ミロネンコ第一書記の活動報告から始まった。その中でミロネンコ第一書記は社会政策という一項を設け、今までコムソモールがほとんど関与してこなかった若者の消費や生活環境といった分野にかける意気込みを語った。そしてコムソモールが若者の余暇に積極的に介入し始め各地のコムソモール組織で様々な形態の試みがなされていることを紹介し、特にノボシビルスクを始めモスクワやタリンなどで創設された「青年イニシアチブ・ファンド」の成功が強調されたのである<sup>(43)</sup>。

ミロネンコ第一書記の発言には、コムソモールがこの分野に人手と資金を投入し、若者のクラブや同好会などの「非公式団体」の活動を組織的に支援していく方針が読み取れる。その具体的な基盤になるのが、州・市・地区のコムソモール委員会が設立する「青年イニシアチブ・ファンド」を代表例とする法人組織だったのである。この組織力によって「非公式団体」にある程度の活動の自律性とインフラストラクチャーを保障し、同時に彼らがコムソ

40 ラウンド・テーブルでのハバロフスク地方コムソモール第一書記ジュエーキンの発言参照。Молодой коммунист.1987. №4. С.18.

41 Комсомольская правда. 4 апреля 1987.

42 А вы кто такие? // Правда. 30 марта 1987.

43 Стенографический отчет XX Съезда ВЛКСМ. М., 1987. Т.1. С.107.

モールの勢力外で自発的に活動するのを抑制するのが狙いであった。

続けてミロネンコは、「近年マスコミを賑わす『非公式団体』には若者の社会的イニシアチブグループから街頭の青少年の犯罪集団まで含まれているが、コムソモールの活動家は彼らの見かけでレッテルを貼るのではなく、活動や問題意識をよく吟味して彼らへの対応を決定しなければならない。」と述べて、若者と直接対話し社会主義にふさわしい「非公式団体」の育成を目指そうと呼びかけた。しかし、それに続けて、「一つだけはっきりさせておかなければならない。『非公式団体』はコムソモールのオルタナティブではない。『非公式団体』はコムソモールと競合する組織ではなく、若者の様々な要求を実現するための形態に過ぎない。」と断言し、あくまでもコムソモールが主たる青年組織であることを主張したのである<sup>(44)</sup>。

このように活動報告では、コムソモールが『非公式団体』を選択的に支持し、その手段として地方のコムソモール委員会が「青年イニシアチブ・フォンド」のような「非公式団体」を取り込む組織を設立することを中央委員会が支持することが表明されたが、その後の大会審議では、「非公式団体」との関係蓄積が比較的進んでいる地域の代議員から、『非公式団体』に対する中央委員会の姿勢に厳しい意見が向けられた。

スヴェルドロフスク州第一書記は、地方組織に資金と裁量権がないために若者の自発的運動を援助することができず、それらが公的な認知を受けずに「非公式団体」としてコムソモールの外で活動している現状を批判した<sup>(45)</sup>。「青年イニシアチブ・フォンド」をいち早く設立したノボシビルスク州からは、同フォンドに対し中央委員会をはっきりとした肯定的評価をせず、全面的支援を躊躇していることに不満が聞かれた。同州第一書記は、若者の日常生活に積極的に関与するためには「青年イニシアチブ・フォンド」の運営にコムソモールが全責任を負うシステムを作らなければならないと述べて、今のような「青年イニシアチブ・フォンド」の曖昧な帰属と規定を見直して、フォンドがコムソモールの組織であるとはっきりさせること、コムソモールの資金を支障なしにフォンドに活用できるようにすることが必要であり、そうしなければコムソモールは「非公式団体」に太刀打ちできないと訴えたのである。

「スパセーニエ」の運動が注目を浴びたレニングラード州第一書記も同じく、「非公式団体」に対するコムソモールの一貫した戦略がまだ不十分であり中央委員会は傍観している場合ではないと発言し、地方の危機感と中央の認識のずれを感じさせた。

彼らに共通するのは、現場で直に「非公式団体」に対応しようとする際に規則に縛られて融通が利かず、コムソモールに接近してきた「非公式団体」に対して具体的な援助がしばらく結果的に「非公式団体」とのパイプが築けないという現場の不満であり、地方組織の裁量権を増やしてほしいという要望である。彼らの中央委員会に対する不信の根本には、下からのイニシアチブは社会的意義があるものでもなかなか上からの支持を得られず、「非公式」な存在として放置されるという歴史的経験があった。

1960年代、ノボシビルスク市コムソモール委員会が若手技術者を集め、企業に対して技術コンサルタント業務を行う組織「ファケル」を立ち上げた。順調に利益をあげたが、結局中央委員会の指示により数年間で閉鎖された。この「ファケル」の構想が「青年科学技術創造センター」としてコムソモールの戦略の柱になるのに約20年、地方のコムソモール組織

44 ステノグラフィческий отчет XX Съезда ВЛКСМ. Т.1. С.108.

45 Стенографический отчет XX Съезда ВЛКСМ. Т.1. С.154.

と青年が試行した「青年住宅コンプレクス」が住宅供給の主体として認知されるのに15年の歳月がかかり<sup>(46)</sup>、地方のイニシアチブが野ざらしにされてきたという認識が一部の代議員に共有されていたことは否定できなかった<sup>(47)</sup>。

20回コムソモール大会は、コムソモールと「非公式団体」の関係を本格的に議論する初めての公けの場であり、その点で意義ある機会であったといえるだろう。しかし、「非公式団体」との選択的協力関係を築く制度的土台が幾つか作られつつあるものの、その対象は若者の娯楽や文化活動が中心であり、社会運動や政治的発言を行う「非公式団体」との関係構築は模索が始まったばかりという状況であった。本大会での規約改正で、コムソモールは青年の社会的・政治的組織と規定された。改めて「政治的」の文言が追加されたことが象徴するように<sup>(48)</sup>、コムソモールは青年層の利益を表出する政治組織を名乗って、他の政治的青年組織と青年の支持を争い競合しなければならない環境に変わりつつあったのである。競合相手を排除してこれまでのように唯一の青年組織という立場を維持できるのか、彼らの意見を取り入れどのようにコムソモールの改革に反映させていくのか、20回大会以降コムソモールはこうした問題に直面し対応を迫られるのである。

#### (4) 「非公式団体」との協力・共存に取り組むコムソモール

「非公式団体」の攻勢にさらされる一方で、コムソモールは「青年イニシアチブ・ファンド」や「青年住宅コンプレクス」などをコムソモールの「非公式団体」と称するようになる。コムソモールが設立した「非公式団体」とは字義通りに解釈すれば矛盾すると思われるが、このレトリックを用いることで、コムソモールは青年の社会的イニシアチブを積極的に支援し、決して青年達の要望や利益を無視しているわけではないと印象づけることができる。しかし、下からのイニシアチブを敏感に活動に取り入れていくコムソモールのイメージを裏返せば、コムソモールから距離を置く自律的な「非公式団体」は「正統」な「非公式団体」ではないことを暗に意味し、もともとは「非公式団体」が取り組みはじめたものにコムソモールが公的な保障を与え、その手柄を横取りすることのレトリックでもあったといえよう<sup>(49)</sup>。

ペレストロイカの進展につれて協同組合など正式な法人組織に転化していく「非公式団体」もあり、「非公式団体」と公式な組織の境界は流動的であったが、同時に「非公式団体」の意味が「公式にはあるべきではない団体」という否定的な意味から、これまでの枠に収まらない新しい創造的活動をする組織に重点が移っていくのである。そしてコムソモールの再生と権威の回復を目指した20回大会以降、コムソモールは組織改革に取り組む過程で「非公式団体」と競合あるいは協力関係を切り結ぶことになる。

その最前線となるのは、ある程度の資金とスタッフを擁し地元の若者の要望を機動的に吸

46 未だに「青年住宅コンプレクス」の立ち上げに80種類以上もの書類を提出しなければならず、事務手続きの煩雑さに対する不満は解消されていない。Молодой коммунист.1987. №4. С.16.

47 既存の組織では対応できない具体的問題解決のための人々の取り組み、自律的な社会のイニシアチブについての理論的考察と歴史の概観において、「ファケル」についても触れられている。Общественные инициативы и самодетельность масс // Коммунист. 1986. №8. С.61-71.

48 Поверяя историей // Молодой коммунист.1987. №3.

49 「非公式団体」とコムソモールの関係を両者の最前線にいる活動家たちが語っている。Самодетельные инициативы. Неформальный взгляд // Коммунист. 1988. №9. С.95-106.



い上げることができる、地区や市のコムソモール委員会であった。特に若者のサブカルチャー・グループについては、登録による活動保障制度が敷かれた後も日陰的存在であることは否めなかったが、大会以降、地方のコムソモール組織がよりオープンにこうした「非公式団体」と接触するようになり、モスクワ、レニングラード、ノボシビルスクのような先進地域の例を参考に、様々な機会や制度を設けて彼らの取り込みを図るようになった<sup>50</sup>。

サラトフの市コムソモール委員会第一書記の述懐によると、新規加入者数で地方組織の活動を評価する慣行が20回大会で正式に廃止されてから地方組織は独自の活動目標を追求しやすくなり、サラトフでは20年越しで陳情していた青年センターの建設が許可されたのを期に、増加する「非公式団体」に対処し主として娯楽と技術分野の「非公式団体」をコムソモール傘下に引き入れる組織的努力がなされていた。

とはいえ、コムソモールが「非公式団体」との関係で主導権を握るためには、制度や組織の整備ばかりではなく、なによりも「非公式団体」と折衝できるこれまでにない人材が必要とされていた<sup>51</sup>。

「非公式団体」に無関心で理解不足なコムソモール活動家が多いという批判はコムソモール内部からも聞かれたが、20回大会前後から新しい指導者達が地方組織に登場し始めた。彼らの中からは後にコムソモール内部の改革グループが形成されるが、そのなかでも中心となったのが「非公式団体」との連帯に成功した地方組織の第一書記達であったのである<sup>52</sup>。

中でも最も注目されたのが、ボルジスキー市コムソモール第一書記アレクサンドル・キセリョフであった。彼の活動や人物像は新聞を始めテレビやラジオでも取り上げられたが、彼が主導した市コムソモール委員会の活動は次のようなものだった<sup>53</sup>。コムソモール員の休日の充実を活動目標に掲げ、市コムソモール委員会の建物改修資金をディスコ開設に転用したことを手始めに、地区執行委員会から土地を借りスポーツ施設の建設に着手した。そして市内の「非公式団体」を15団体集めてコムソモール附属組織「ポーイスク」を設立し、彼らにコムソモールの建物を開放したのである。「非公式団体」の種類はヘビー・メタリストからエスペラント語グループまで様々であったが、「ポーイスク」は会費と各「非公式団体」のイベント等の収入による独立採算で運営された。

これが成功を収めただけでなく、企業が一人の紹介につきコムソモール委員会に3ルーブリを支払うことで休暇中の学生や生徒に臨時の仕事を斡旋し、地元企業と若者のパイプ役を果たすビューローを開設し、これは二年目には年間で延べ3000人に職を斡旋するまでに成長した。またコムソモールみずから政治討論クラブを設立し、「非公式団体」との対話の場を設けた。こうした活動はコムソモール員の要望に応える点でも、また地方組織の資金繰りを安定させる点でも、コムソモールの模索する新しい活動形態の見本とされるようになり、1986年にはボルゴグラード州コムソモール委員会の支持が得られなかった市コムソモール

50 「非公式団体」との対話や協力関係を進める地方組織の活動例。 Гомо номо ждут внимания. Письма, отклики, мнения // Молодой коммунист. 1987. №5; Самоопределение поколения // Молодой коммунист. 1987. №7; Вместе, а не вместо // Молодой коммунист. 1988. №8; Комсомольская правда. 16 августа 1987.

51 Комсомольская правда. 28 июля 1987.

52 彼らは1989年にコムソモールの新指導者の集団「スルグート・オルタナティブ」を立ち上げる。

53 Пусть будет дверь открыта // Комсомольская правда. 29 октября 1987.



の活動も87年の10月にはコムソモール中央委員会ビューローから推奨され、その活動が中央からも認知されるようになったのである<sup>(54)</sup>。

一方、ニジニ・タギルでは、長年続いていた大気汚染が悪化し市民生活に深刻な被害をもたらしたのを契機に、大気汚染の元凶であるコークス炉の停止を訴えてデモが行われた。そのデモを提案したのはコムソモールの地区委員会であり、コムソモール市委員会がデモの組織者となったのである。デモの許可申請は党によって却下されたが、それでもコムソモールの主導でデモとミーティングが実行され約1万人が参加した。その結果、市民の要求であるコークス炉の稼働中止は一部ながら受諾され、その後新設された市の環境問題を話し合う委員会には、市コムソモール第一書記でデモの指導的役割を果たしたワジム・ドゥダレンコが委員として参加することになった。

ドゥダレンコが以前から環境問題について発言しエコロジー運動に携わる「非公式団体」との付き合いもあったことが、コムソモール主導の公害反対デモ実現の土台となったのである。彼はデモの数ヶ月後にはスヴェルドロフスク州コムソモールの組織部長に転任したが、彼のニジニ・タギルでの活動は、「非公式団体」と連帯して社会的イニシアチブをリードする理想的コムソモール像を体現するものと評価され、新しいコムソモール指導者として期待がかけられるひとりとなった<sup>(55)</sup>。

コムソモールはこのように手探りで若者の「非公式団体」との関係を模索していたが、政治問題について議論し社会に発言するいわゆる政治クラブといわれる「非公式団体」は、娯楽・文化活動やエコロジー運動の「非公式団体」以上にコムソモールにとって対応が難しい対象であったといえるだろう。彼らの中には、コムソモールが唯一の公式青年組織であるという特権的な現状を変えるべきだと主張し、また社会主義そのものを批判するものもあった。しかし徐々にコムソモール内部にも政治議論グループが活動するようになり、コムソモールの政治クラブと外部の「非公式団体」の政治クラブとは必ずしも緊張対立するばかりではなかったのである。そもそも「非公式団体」の政治クラブのメンバーがコムソモール員であることは珍しくはなかった。

モスクワ教育大学の歴史学部の学生が中心に集まり、コムソモールの規約改正議論で積極的に発言した「オブシチナ」にはコムソモール員が多く、オレンブルクの技師アレクサンドル・スハレフの呼びかけで1987年5月に設立した「全ソ社会政治クラブ」のモスクワ・メンバーらとともに「クラブ間コムソモール・グループ」を組織した<sup>(56)</sup>。彼らの問題意識は「非公式団体」運動におけるコムソモールの役割を考えることであり、両者を有機的に結びつける環のような役割を果たした。

ナベレジユニエ・チェルニの政治クラブ「ブハーリン」もコムソモール員達で作った「非公式団体」であった。80年代前半に音楽クラブに集まった若者達が、政治社会問題を議論し自分達でマルクスやレーニンを始めとする著作を検討し始め、ブハーリンの著作を解禁前

54 Полоса препятствий // Комсомольская правда. 14 января 1986; О работе волжского горкома комсомола волгоградской области по развитию самодеятельности и инициативы молодежи в свете решений XX съезда ВЛКСМ. Постановление Бюро ЦК ВЛКСМ 28 октября 1987 года // Документы ЦК ВЛКСМ 1987. М., 1988. С.110-116.

55 Смог над городом // Комсомольская правда. 6 апреля 1988.

56 Неформальная россия. С.277.

から密かに読んで研究するなど活動を続けていた。当初はコムソモールの理解も得られなかったが、歴史の再検討が進み1988年2月にブハーリンの名誉回復が決定されると、以前からブハーリンの名誉回復を当局に訴えていたこのクラブの存在が、コムソモール員が作った政治クラブの先進例としてコムソモール中央からも評価されるようになったのである<sup>(57)</sup>。

しかし、1987年の状況では、政治クラブと対話するどころか距離をおくのがコムソモール指導部の一般的反応であった。「全ソ社会政治クラブ」の第二回会合がタガンログで開かれた際、地元のコムソモール指導者は会合に一度も出席しなかった。彼らは「全ソ社会政治クラブ」代表のスハレフがコムソモールに代わる青年組織の立ち上げを訴えていることを警戒し、会合に参加しない理由を記者に問われて「上層部から批判を受けるので接触しない」と答えている<sup>(58)</sup>。

この時期、政治的な「非公式団体」が増加し、コムソモール組織にも政治クラブが作られつつあったが、政治的「非公式団体」に対処した経験がほとんど無いコムソモールにとって、すぐに彼らに対する一貫した方針を策定し、彼らと政治的議論を戦わすことは困難であったといえるだろう。1987年8月に「非公式団体」の初めての全国的会合が開催された際にも、コムソモールはとりあえず静観していた。

「社会的イニシアチブとペレストロイカ：出会いと対話」と称された「非公式団体」初の全国的会合には約50の団体から600人が参加した<sup>(59)</sup>。会合の主催団体となったのは、「民主的ペレストロイカ」「社会的イニシアチブ・クラブ」「社会的イニシアチブ・ファンド」などであり、オレグ・ルミャンツェフ、ボリス・カガルリツキーら青年社会主義者が中心であった。しかし、集まった団体の志向や活動内容は政治グループから自然保護・文化財保護団体、慈善団体、労働運動組織など様々であり、彼らを集結させたスローガンは「暴力と暴力の宣伝」、「民族主義と人種差別」、「他の集団の自律性を侵す真理の独占」に対する三つのニュートに過ぎず、官僚主義を駆逐しペレストロイカを促進するという曖昧でありきたりの認識が共通するだけであった。

当時、モスクワだけで千あまり、レニングラードでは二百の「非公式団体」が存在するといわれている現状では、この会合の枠内に当時の「非公式団体」の運動全体が収まりきるはずはなかったが、参加団体の間で率直な意見交換が行われ、ペレストロイカに「非公式団体」が積極的に参加し連帯する気運が醸成されたのは事実である。しかし、「民主主義とヒューマニズム」は憲法の非イデオロギー化を訴え、また70年間の社会主義は過ちであったとの発言も聞かれ、それぞれの「非公式団体」が描く新しい政治体制像に、穏健なものから急進的なものまで開きがあることは如何ともし難かったのである。

最終的には拘束力を持つ組織の結成は見送られ、社会主義を標榜する「社会主義社会クラブ連合」とイデオロギー色を排除した「社会的イニシアチブ・サークル」の二つの緩やかな連帯組織の設立が宣言された。これによって一応の「非公式団体」間の横の連携ができたもののグループの分裂や団体間の離合集散が続き、人民戦線の創設まで統率の取れた「非公式団体」の運動を展開することはできなかった。

57 Комсомольская правда. 7 октября 1988.

58 Комсомольская правда. 23 октября 1987.

59 Яковлев В. Прощание с базаровым // Огонек. 1987. №36.

この会合から約二ヵ月後の1987年10月エリツィンが更迭されると、「社会的イニシアチブ・クラブ」を中心としたエリツィン擁護運動が起こり、地元のスヴェルドロフスクでは解任理由の説明を求めてデモが一月続いて、中心となった若者が新たな「非公式団体」を組織して民主化運動を展開していた。しかし、若者を中心に政治に対する不満と失望感が広がる中でコムソモールはこの時期特に組織的対応を採ることはなく、1987年末の第二回中央委員会総会まで「非公式団体」について公式の態度表明をすることはなかったのである。

この時期、「非公式団体」とコムソモールの関係で新たな進捗が見られたのは自然保護の分野である。「学生自然保護レンジャー」組織は1960年にモスクワ大学生物学部のコムソモールが設立して以来の歴史がある「非公式団体」であり、同様の組織は1970年には11、85年には96、87年には121組織に増加し、着実に自然保護活動で実績を積み上げてきた。しかし彼らに対してはしばしば、コムソモールの課題からの逸脱、越権行為、あるいはセクト主義・エリート主義、無統制などの非難が浴びせられ、1924年に設立された「全ソ自然保護協会」は「学生自然保護レンジャー」組織を認めていなかったが、1985年に「全ソ自然保護協会」と環境保護活動をする「非公式団体」との調整委員会が作られ、両者の協力が可能になったのである<sup>(60)</sup>。

コムソモール中央委員会の後援で1987年12月に初めて開催された全ソ「学生自然保護レンジャー」大会は、最初の大会の試みから15年後のことだったが、そこで85年に設立された「全ソ自然保護協会」と「非公式団体」の調整委員会に不満足意見が出された。そして調整委員会のメンバーがほとんど役人に占められていることに反対し、学生団体の主導で別組織を設立することを決定したのである。

#### (5) コムソモールの将来像の模索

同じ時期に開催された第二回コムソモール中央委員会総会は、20回大会からこれまでの変化を総括する初めての場となった<sup>(61)</sup>。ミロネンコ第一書記は「いわゆる若者の非公式団体について」と題して、最近「非公式団体」が少なからず話題になっていると前置きした上で、「非公式団体」の種類は様々であるが、コムソモールが徹底的に戦わなければならないような「非公式団体」は、この運動に存在するにしても主流ではないという全体認識を示した。

その上で、コムソモールのオルタナティブ、競争相手となる「非公式団体」は、それがあると主張するものの夢想の中にしか存在しないと断言し、20回大会と同じく、コムソモールが唯一の青年組織であり、その地位を放棄するつもりのないことを再度確認したのである。そして、職場や学校でコムソモールに加入している若者が自分の興味にあう他の組織に参加することは、その活動がコムソモールの規約に矛盾しない限り正当な権利として認められると述べて、コムソモール員が「非公式団体」に参加することを正式に認めた。

しかし、ミロネンコは、若者のイニシアチブがなぜ、コムソモールを含めて百以上もある既存の社会組織内で実現できないのかと問題提起し、これまで青年層の要求を十分考慮して

60 Правда. 30 марта 1987.

61 Комсомольская правда. 8 декабря 1987. С.2-3.

こなかったコムソモールの責任を認めたくえで、ペレストロイカの第一段階が完成しつつある今、コムソモールこそ青年層の期待に応えられると「非公式団体」に対抗意識を見せたのである。そして総会の決定には、コムソモールの決意を示すかのように「コムソモール委員会は社会的に有意義な青年のイニシアチブを積極的に支援しなければならない。」との一文が盛り込まれた。

第二回中央委員会総会でミロネンコ第一書記が「非公式団体」とコムソモールの「あるべき」関係を語った数日後に、コムソモール上級学校青年イデオロギー政治教育部長レバノフの談話が「コムソモリスカヤ・プラウダ」紙に掲載された<sup>62)</sup>。彼は1987年の春にコムソモール上級学校が実施した社会調査結果をもとに、「非公式団体」の現状について語った。1985年以前は「非公式団体」の研究はほとんど手つかずであったので、これは数少ない「非公式団体」に関する本格的な社会調査である。

調査結果によれば、「非公式団体」のメンバーの半数以上がコムソモール員であり、また「非公式団体」のリーダーの四分の一をコムソモール員が占めていた。コムソモールと「非公式団体」のメンバーの重複が示すように、「非公式団体」はコムソモールに必ずしも拒否反応を示しているわけではなく、「非公式団体」の30%が公式に認知されることを希望していた。しかし、そのうちの14%は、公式に認知されない理由はコムソモールの「非公式団体」への無関心、敵がい心にあると考えている。一方、「非公式団体」同士が連帯しようとする動きが進んでおり、1987年には公式ではない祭典・大会・会合などが全国で80以上も催されている。その際、四分の一の「非公式団体」がコムソモールに支援を依頼しているが、実際に支援を受けたのはその30%であった。

このデータを踏まえてレバノフは、「非公式団体」を禁止する措置は適当でないという意見がコムソモール上級学校で多数を占めていること、そして「非公式団体」が今後も増加し活動内容もますます多様になっていくだろうことを指摘した。これは、第二回中央委員会総会でミロネンコが表明したコムソモールの巻き返しが容易ではないことを意味している。

レバノフと同じくコムソモール上級学校のイリインスキーは、事態をより深刻に捉えていた<sup>63)</sup>。すでにコムソモールは唯一の青年運動組織ではありえず、さらに民主化が進めばまたさらに新しい形態の「非公式団体」が誕生するだろうと彼は予測し、このような時代の流れの中でコムソモールの果たすべき役割は今のところ明らかではないと、コムソモールの将来像が描け無きことを率直に語っている。1988年になるとイリインスキーの評価が、現実味を帯びてコムソモールに迫ってくるのである。

#### 4. 第19回党協議会に向けて

1987年の後半は、「非公式団体」の政治的発言や行動が目立ち始めた時期である。その一方で、脱イデオロギー化と呼ぶほどには極端ではないにしても、青年層のイデオロギー教育機関であるコムソモールでイデオロギー活動の比重が低下し、たとえイデオロギー色を出すにしても背後に控え目に出す程度のイデオロギーの希薄化が見られた。

62) Комсомольская правда. 11 декабря 1987.

63) Ильинский И. Перестройка состоится, если... // Молодой коммунист. 1987. №12. С.16.

長年、反体制的若者文化の代表例であったロック・ミュージックの社会的認知が進んだのもこの頃である。ラスプーチンら三名の著名な作家がこうしたイデオロギーの緩みを憂い、「プラウダ」に書簡を送ったのは1987年の11月であった<sup>(64)</sup>。彼らは書簡の中で、当時話題になっていたドキュメンタリー映画「若いことは楽か?」を引き合いに、これまで隠蔽されてきた若者文化や「非公式団体」がペレストロイカで率直に語られるようになり、その行き過ぎた露悪趣味によってこうした社会の負の存在が積極的に認知され称賛されるようになったことに嫌悪感を露わにしている。この変節の一翼を担ったのは、「ロック・ラボラトリー」や「青年イニシアチブ・フォンド」であり、若者の娯楽に積極的に関与するコムソモールであったことは否定できない。

モスクワの青年宮殿が長年かかった末、1988年1月に完成した際、モスクワ市党第一書記のザイコフは市のコムソモール・ビューローのメンバーと会談し、青年宮殿をペレストロイカにふさわしいコムソモールの活動の場として生かすべきだと直言した。そして、長期の建設期間中活動を検討する時間が十分あったにも拘らず、現在の利用計画がディスコの開催だけであることに苦言を呈し、独立採算を目指すあまり金銭的利益にとらわれ、政治教育をないがしろにしてはならないと釘をさしたのである。「最近コムソモールは娯楽活動だけに関わっているようになってしまった。他のことは放棄してしまったようだ。」という彼の発言は、当時のコムソモールの一面を鋭く突いていた<sup>(65)</sup>。しかし、88年の春以降ソ連社会で民主化運動が盛り上がりつつある過程で、政治的な「非公式団体」にどのように対応していくべきなのかというアクチュアルな政治的課題に、コムソモールも取り組まざるを得なくなるのである。

### (1) 「非公式団体」の政治運動の激化

1987年秋のエリツィン更迭事件後、その解明を求めて「非公式団体」が各地で示威行動を起こし、当局と「非公式団体」の関係を緊張させた。87年の末頃には、当局は非公式団体の政治行動に不信を募らせ、「非公式団体」の中に反対政党や自由労組の設立を目指して反社会主義的文書を公表し、ソ連にブルジョアの多元主義の導入を図るデマゴグが混じっていると非難した<sup>(66)</sup>。

ゴルバチョフ共産党書記長は1988年の初頭の会談で、一部のインテリ特に若者の急進的な言動に対する党の反撃が、ペレストロイカそのものに対する反動であると思われるがそれは誤解であると釈明した<sup>(67)</sup>。しかし、党指導部の意図するペレストロイカの枠を越えつつある「非公式団体」の運動と実際の改革の進行には本質的な齟齬が生じつつあったのである。

そうした政治情勢の中で1988年1月、モスクワ市コムソモールと「社会主義社会クラブ連合」の会合が二日間にわたって開かれた<sup>(68)</sup>。これは「社会主義社会クラブ連合」の希望で

64 Легко ли быть молодым? // Правда. 9 ноября 1987.

65 Комсомольская правда. 30 января 1988.

66 Демократия и инициатива // Правда. 27 декабря 1987.

67 Комсомольская правда. 13 января 1988.

68 Пришельцы? // Комсомольская правда. 22 мая 1988.



非公開とされたが、コムソモールが政治的「非公式団体」と直接対話する初めての本格的な場であったといえるだろう。しかしながら、その場で何某かの具体的成果を出すことはできず、コムソモールが沈黙を守った1987年8月の第1回「社会主義社会クラブ連合」大会の時とは異なり、同連合の中心人物達は誹謗中傷を含めてコムソモールから批判を浴びることになった<sup>(69)</sup>。一部の「非公式団体」のみが脚光を浴び、外国メディアの前でソ連の青年運動を代表しているかのように振舞うことへの不快感や、コムソモールを現在の学校や職場単位ではなく、「非公式団体」のような利益や関心別の組織単位構成に改編すべきだとの発言への反発が、コムソモール側にあったと思われる。

しかし、「非公式団体」の政治運動は、1988年春に益々拡大していった。3月13日の「ソヴィエツカヤ・ロシア」に掲載されたニーナ・アンドレーエヴァの投書は、「非公式団体」が抱いていた政治的揺り戻しへの不安が当座の危機感に転じる契機となり、民主化を求める街頭でのデモや集会が頻発するようになった<sup>(70)</sup>。さらに「非公式団体」にとっての重要法案である「社会団本法」に関する公開討論や、審議過程の情報公開を要求する集会が続いていた<sup>(71)</sup>。

その一方で、彼らは1988年6月の第19回党協議会を民主化の砦と考え、党協議会に向けての政治アピールの作成と連帯行動を目指しての協議を開始したのである<sup>(72)</sup>。4月末にはモスクワ市コムソモールの代表も参加して「ソビエト社会の民主化」と題する「社会主義社会クラブ連合」のセミナーが開催された。そこでは「社会主義社会クラブ連合」の綱領が検討されて、社会主義勢力を中心に「非公式団体」の統一政治行動が目指されたのである。

しかし、1月には「全ソ政治社会クラブ」が社会民主主義派とマルクス主義派の対立で分裂し、「社会主義社会クラブ連合」の中心グループの一つであった「オブシチナ」が、活動方針に社会主義の志向を残すことに反対して5月の第3回大会で同連合から脱退するなど、「非公式団体」運動の内部で目指すべき体制像の違いが深まっていた<sup>(73)</sup>。

緊迫する政治過程の中で第三回コムソモール中央委員会総会が5月半ばに開催された。今回の総会はピオネールとの合同開催であり、2月の党中央委員会総会で検討された教育改革と「コムソモールの資金に関する規定」が中心に議論された。ミロネンコ第一書記は活動報告の「大会一年後の総括と課題」の中で、「非公式団体」をめぐる熱狂は止んでいないとの認識を示しコムソモールの立場を再確認した。即ち、圧倒的大多数の「非公式団体」の活動は、社会主義の選択の枠内で若者の利益と要望を実現発展させようとしていて、その枠から逸脱している「非公式団体」は極少数に過ぎず、コムソモールはその例外を排した大多数の「非公式団体」とは、青年の利益のために協調できるという従来の見解の繰り返しであった<sup>(74)</sup>。

69 Комсомольская правда. 31 января 1988.

70 Vladimir Brovkin, "Revolution From Below: Informal Political Associations in Russia 1988-1989," *Soviet Studies* 42:2 (1990), pp.233-257.

71 「市民的尊厳」「ベレストロイカ88」「民主的ベレストロイカ」などが2月以降「社会団本法」についてのディスカッションや、法案に対する要求の公表を主導した。Неформальная россия. С.242, 246-247.

72 1月早々、「市民的尊厳」や「グラスノスチ」などが「非公式団体」会議を主催し、連帯が模索された。Россия 2000 современная политическая история. Т.1. М., 2000. С.53.

73 Неформальная россия. С.260-261.

74 Комсомольская правда. 17 мая 1988. С.2-3.

そして、「『我々とともにいないものは、我々と相容れない』という態度は今日では正しくない。社会主義と相反しないもの、ペレストロイカに賛成するものは、我々とともにある。」という態度がより正しいのだ。」と「非公式団体」とコムソモールの協力同調の可能性を否定しないもののそれ以上に踏み込んだ言及はせず、続けてミロネンコは、民主化が深化すればするほどコムソモールが青年のために活動できる余地はますます広くなり、その結果目下のコムソモールの困難と失敗に付け入ろうとするものの相貌が明らかになるだろうと述べた。これは、あくまでも青年運動のリーダーはコムソモールであり、政治的な「非公式団体」とコムソモールが同格になることはありえないというコムソモール中央委員会の原則的立場宣言であり、「非公式団体」への牽制であるといえよう。

またコムソモールとして党協議会に代議員を出すことを希望し、各コムソモール組織で人選を積極的に行うように指示した。88年の5月以降、党協議会に向けた代議員の選出や協議会テーゼの議論の過程で、各地でコムソモールと「非公式団体」の関係が新たに築かれていくのである。

## (2) 文化・娯楽分野における「非公式団体」との融合

1988年の春は「非公式団体」が政治運動を展開し、コムソモールが警戒しつつその対応を模索している一方で、「青年イニシアチブ・フォンド」を始めとするコムソモールの余暇娯楽支援事業は各地で発展し、「非公式団体」としてコムソモールの外で活動していた若者達を傘下に取り込む試みは実績を上げつつあった。各地で「青年イニシアチブ・フォンド」に類似した組織が設立され、ハバロフスク地方やレニングラード市のコムソモール委員会には、「非公式団体」との折衝を業務とする「青年イニシアチブ支援部」が新設された。

地方組織の「非公式団体」支援活動が軌道に乗った背景には、1987年の20回コムソモール大会以降、各コムソモール委員会が比較的自由に組織編成やスタッフの配置・拡充を行えるようになったことがある。この規制緩和によって各コムソモール委員会はスタッフや資金を「非公式団体」関連の活動に振り向けることができるようになっただけでなく、「非公式団体」の人材をコムソモール委員会付属の「青年イニシアチブ・フォンド」など新しい組織に登用することが可能になった。「青年イニシアチブ・フォンド」の先進地であるノボシビルスク市の場合、1988年前半には400以上の「非公式団体」が加入し、フォンドは11のカフェ、18のディスコを運営していた。コムソモール委員会の周辺にはコムソモールと「非公式団体」が協働する場が作られつつあったのである<sup>(75)</sup>。

しかし、コムソモールと「非公式団体」の連携や人材の交流は、青年が集う場としてコムソモールの存在を再評価し、組織の足腰を強化させる契機にはならなかったのである。新しい活動と周辺組織の活性化は、かえってコムソモール組織の核であるべき委員会を融解させることになった。ノボシビルスク市のコムソモール第一書記は、ノボシビルスク市の現状から判断して、学校や職場を単位としたコムソモール組織の活動は限界になりつつあり、「非公式団体」のような若者の趣味や関心を共有するグループを組織単位とすることができるよ

75 地区コムソモール委員会の催しに「非公式団体」が参加したり、第一書記の部屋をスポーツジムに改装し「非公式団体」を受け入れた例など。Комсомольская правда. 19 апреля 1988; Комсомольская правда. 27 апреля 1988.

うに、現在の組織原則からの解放が検討されるべきであると発言した。コムソモール組織は足元から変容しつつあったといえるだろう<sup>(76)</sup>。

ノボシビルスク市のコムソモール第一書記の発言には、非常に論争を呼ぶ発言であるが敢えて公表するとの編集部の断り書きが付されている。これが示唆するのは、政治制度の民主化と社会の多元性を求める「非公式団体」が、ノーマンクラトゥーラに組み込まれた官僚組織として現在のコムソモールを糾弾し、青年の利益を表出する新たな政治運動の結集を目指して唯一の青年組織の特権を巡りコムソモールと攻防する局面と、他方でコムソモールと「非公式団体」の文化・娯楽活動における融合と協調が並行して進行しつつあるという重層的な現象であった。

### (3) 19回党協議会前の対話

第19回党協議会の代議員選挙が始まる頃、「非公式団体」の政治運動に、正面から社会主義体制の打倒を訴える「民主連合」が加わった。左右の両翼が広がる「非公式団体」は、党協議会に向けた中央委員会のテーゼが5月末に公表されると、毎週のように集会や示威行動を行うようになり、特に5月のレーガン米大統領モスクワ訪問の際にはその拡大が見られた。しかし、街頭でのデモや集会の際には当局による参加者の拘束や解散が強行され、党協議会を前に「非公式団体」の代表がモスクワ市執行委員会と党の指導部に会見して集会の妨害中止を訴えたが、当局の対応は変わらなかった。

「非公式団体」の政治行動に当局の監視が強まる中で、「非公式団体」の代表が参集する会合がモスクワ市コムソモール委員会の協力で合法的に開催されたことは注目に値する。6月5日に青年宮殿で開催された会合には若者の「非公式団体」40団体から500人以上集まり、党協議会への中央委員会テーゼを議論して党協議会に対する要求文書を策定した。中心になったのはルミャンツェフを代表とする「民主的ペレストロイカ」であった。

要求項目は、統治機能を党から剥奪し、政治社会組織内の党员のみを通して政治路線の実現を図るように政党法を制定すること、すべての権力のソビエトへの移管、その前提となる自由な競争選挙、個人の国内外を含めた移動の自由など政治制度の民主化と個人の権利の保障のほか、社会保障の整備、労働集団による自主管理の導入といった経済的要求に加え、自主的な政治社会経済活動を保障する「社会団体系」の制定、集会・デモの権利などが要求された<sup>(77)</sup>。

特に青年層に関する要求として、青年が自主的組織を設立する権利を「社会団体系」で保障し、自主組織が青年に関わる政策決定に関与することができるように、ソ連青年組織委員会に代表を派遣する権利を認めること、また学生の利益のために学生連合を作ることが出された。この要求文書は各団体の代表で構成される編集委員会ですらに検討され、1週間後の6月12日、今度はエネルギー文化の家での会合で審議された<sup>(78)</sup>。

その場では、コムソモールに分派活動を認めるべきだという意見や、まず環境問題への取り組みを優先すべきという主張など多岐にわたって討論された後、「非公式団体」が集結し

76 Молодой коммунист. 1988. №8.

77 Ваша позиция? // Комсомольская правда. 7 июня 1988.

78 Ваша позиция? // Комсомольская правда. 16 июня 1988.

て人民戦線を組織し、統一のとれた政治行動を行う方針が提唱されたのである。これは87年8月の「非公式団体」の大会以来、なかなか実現しなかった「非公式団体」の共同組織設立の試みであった<sup>79)</sup>。

党協議会への要求文書はまず各組織一票の投票で基本採決を行い、その後各団体で20分間議論した後、修正を加えて再度投票のうえ採択され、党協議会代議員であるユーリー・アフナシエフに委託された<sup>80)</sup>。12日の会合では、モスクワ市コムソモール委員会インストラクターも演壇から発言し、これまで「非公式団体」と距離を置いてきたコムソモール「アパラチキ」像の払拭に努めた。「非公式団体」が共同で要求書を作成し連携したことは、コムソモールの党協議会に向けた戦略の策定に何某かの影響を与えたことは否定できないだろう。

しかし、「非公式団体」の政治運動の攻勢を警戒しているのは、コムソモール指導部ばかりではなかった。「非公式団体」の活動に参加しているコムソモール員が集まった「クラブ間コムソモール・グループ」の書記イヴァンツォフは、「コムソモーリスカヤ・プラウダ」の投書の中で、コムソモールが経済活動と娯楽活動に傾斜するあまりイデオロギー活動を怠っていると糾弾した<sup>81)</sup>。

あらゆる種類の「非公式団体」がモスクワで活動し、公然と資本主義の復活を訴え反コムソモールのプロパガンダを流布しているにも拘わらず、コムソモールはこれに対抗する術がないと危惧する「クラブ間コムソモール・グループ」は、4月末にモスクワ市コムソモール・イデオロギー担当書記のもとを訪れ、モスクワ市コムソモールにイデオロギーセンターを設けて「非公式団体」との戦いの拠点とすることを提案したのである。

しかし、モスクワ市コムソモールは、すでに青年センターがあり、青年宮殿では政治クラブの討論会を実施しているのでこれ以上の組織は不要であるとの提案を拒否した。さらに党協議会開催三日前の6月25日、「民主連合」や「社会主義社会クラブ連合」の集会に対抗して、コムソモールグループが計画した青年宮殿前での会合に対しても口頭で支援を約束しただけであった。

こうしたコムソモール指導部の対応と「クラブ間コムソモール・グループ」の活動のずれは、外から「非公式団体」を眺めるコムソモール中央と、「非公式団体」の中で活動しコムソモールの危機を肌身で感じている「クラブ間コムソモール・グループ」の温度差を表しているといえるだろう。「非公式団体」の政治運動とコムソモールの関わりが地方ではどのように展開しているのかを取り上げた後、コムソモール内の党協議会に向けた議論を検討する。

#### (4) コムソモールの意見の集約

「青年住宅コンプレクス」の成功地域として20回コムソモール大会前後から注目を集めているスヴェルドロフスク州では、1987年11月のエリツィン更迭事件の時にデモを組織し、

79 しかし党協議会後の7月3日には、「オブシチナ」「市民的尊厳」「メモリアル」「ペレストロイカ88」「社会的イニシアチブ・クラブ」が脱退する。Неформальная россия. С.289.

80 党協議会への要求文書の内容については次を参照。ボリス・カガルリツキー『モスクワ人民戦線 下からのペレストロイカ』柘植書房、1990年、211-225頁。

81 Комсомольская правда. 1 июля 1988.



88年3月にはスターリンの抑圧犠牲者追悼集会を主導した「ミーティング87」という政治クラブと、ニジニ・タギルで活動するエコロジー団体「浄化」が目立った活躍をしていた。

1988年12月号の「マラドイ・コムニスト」に掲載されたスヴェルドロフスク州コムソモール第一書記の発言によれば、同州には35以上の「非公式団体」が活動し、「非公式団体」の参加者延べ1000人以上のうち40%がコムソモール員であった。こうした状況を背景に、スヴェルドロフスク州コムソモール委員会プロパガンダ部は、「非公式団体」との協力を活動方針に掲げ、1988年5月には州コムソモール第一書記が組織委員長を務める「非公式団体」とコムソモールの対話の場「ディアログ」を開催したのである<sup>(82)</sup>。

コムソモールも他の参加179団体と対等の立場での会合であり、30人のコムソモール活動家のほか党代表も15人参加したが、政治活動のセッションにはコムソモールと党の代表はほとんど出席せず、政治運動でのコムソモールと「非公式団体」の関係に実質的進展はみられなかった。しかし、「ミーティング87」のほか政治クラブ4団体を含む、27の「非公式団体」がこの会合で「社会団体協会」を設立し、コムソモールも一般構成員として加わるようになった。コムソモールと「非公式団体」が恒常的に接触する場ができたことには意義があるといえよう。

クイビシェフ州の場合、ロシアの人民戦線形成の先駆けとなったヤロスラブリ州と同じく、党協議会代議員の選出方法に対する反発が「非公式団体」の政治行動に火をつけた。1988年5月に青年社会主義者達が組織した政治クラブ「展望」が中心となり、6月22日には州党第一書記ムラヴィヨフの代議員選出に反対して1万人が集まる大集会が開かれた<sup>(83)</sup>。コムソモールは政治クラブ「展望」を始め州内の40あまりの政治的「非公式団体」とクラブ「コムソモール活動家、プロパガンディスト、その他希望者のために」を設立し、6月の州コムソモール総会では「非公式団体」との協力が討議されたのである<sup>(84)</sup>。

「非公式団体」と接触し関係構築を探る地方コムソモール組織の試みが、「非公式団体」との協同組織の設立という一定の成果をあげることができたのは、党協議会を前に「非公式団体」の政治行動が高まる過程で、コムソモール内部でも政治改革や党に対する要求が顕在化してきたからである。党協議会の代議員選出からコムソモールが締め出されていることや、テーゼの中でコムソモールの地位と役割の言及が不十分なこと、そして党のコムソモール指導のあり方などに不満がくすぶり始め、「非公式団体」の政治行動とコムソモールが同調する余地が拡大したことを意味している。

しかし、こうしたコムソモールと「非公式団体」の接近の試みが、どこでも結実するわけではなかった。オムスク州では当初、州党委員会の要請を受けてコムソモールから7人の党協議会代議員候補を選出したが、党内の議論でどんどん削減され、最終的には0となった。コムソモール側が説明を求めると、協議会は党の管掌事項でありコムソモールには無関係であるとの回答があり、党協議会代議員の選出に積極的参加を指示している第二回コムソモール中央委員会総会に矛盾すると同州コムソモール内部でも反発が生じたのである<sup>(85)</sup>。

82 Авторитет до востребования // Молодой коммунист. 1988. №12.

83 Комсомольская правда. 25 июня 1988.

84 Аппарат перестраивается // Молодой коммунист. 1988. №11.

85 Комсомольская правда. 19 июня 1988.



このような事態の中で5月末に行われた「非公式団体」主催の討論会では、オムスク国立大学コムソモールの代表が、審議権の無いオブザーバーとしてでも党協議会に青年の代表を派遣できるように、州党委員会にアピールを送ることが提案され「非公式団体」の支持を得た。二日後には急ぎょ州コムソモール・ビューロー会議が開催され、地区第一書記も加わってこの提案が議論された。しかしその後何の説明もないままこの提案が立ち消えとなり、「非公式団体」だけでなく一般コムソモール員の信頼も州コムソモール委員会は失うことになったのである。

コムソモールは党協議会にむけて活発化する「非公式団体」の政治運動と協調関係を模索し、またその一方で「非公式団体」の急進化をけん制しつつ、党協議会に向けた自己の戦略を立てようと努力していた。コムソモール中央委員会ビューロー決定で、中央委員会にはテーゼに関するコムソモールの意見を検討する三つの作業部会が設けられ、集められた意見はミロネンコの協議会での発言草稿に生かされることになった<sup>(86)</sup>。

地方のコムソモール組織での会合や<sup>(87)</sup>、投書の意見などを総合するならば、党協議会の代議員選出方法への直接的不満以外に、青年層のための政策的配慮と党が干渉しコムソモールの自律性を損なっている現行の党・コムソモール関係の是正が党に対するコムソモールの要求の柱であった<sup>(88)</sup>。コムソモールは党の青年組織ではなく独立した組織であると主張し、コムソモールが独自に青年の住宅問題解決に取り組もうとしていることを強調したモスクワ市コムソモール第一書記の発言や<sup>(89)</sup>、コムソモールはペレストロイカに協力する青年運動の核となるべきであり、党をコピーしたものではないとの意見に賛同が集まったのである<sup>(90)</sup>。

#### (5) 協議会とコムソモールの戦略

しかし、コムソモール中央委員会が、党協議会に対する最終的態度を公式に表明したのは協議会開催の二日前であった<sup>(91)</sup>。社会のコムソモールを見る眼は、1988年初頭から本格化した「非公式団体」との相克によって厳しさを増していた。今後の体制改革の帰趨を決定する党協議会で、公式に青年層を代表するコムソモールが如何なる存在感を示せるのか、コムソモール指導部にとっては死活問題であり慎重な戦略策定を要したのである。

公表されたコムソモール中央委員会ビューローの文書は、コムソモール員の党協議会に向けたこれまでの意見はミロネンコ第一書記の発言草稿に生かされると言明したうえで、テーゼでは我々の政治・国家システムにおけるコムソモールの地位と役割が不明確なので、党協

86 Бюро ЦК ВЛКСМ постановление об обсуждении Тезисов ЦК КПСС к XIX Всесоюзной партконференции в комсомольских организациях страны // Комсомольская правда. 2 июня 1988.

87 イルクーツク州では州コムソモール総会の前に第一書記マティエンコを囲んで議論し、党のコムソモール指導の方法を改めることを党への要求とする案が固まった。また代議員選出方法に反対があった。Комсомольская правда. 17 июня 1988; ボルゴグラード州総会の前に「非公式団体」との会合で党協議会について議論し、互いの理解不足を埋め合わせる努力がなされた。Комсомольская правда. 28 января 1988.

88 ドネツク州の場合。Комсомольская правда. 2 июня 1988; ハバロフスク地方の場合。Комсомольская правда. 10 июня 1988; 12 июня 1988.

89 Комсомольская правда. 10 июня 1988.

90 Комсомольская правда. 19 июня 1988.

91 В Бюро ЦК ВЛКСМ // Комсомольская правда. 26 июня 1988.

議会の場でコムソモールの立場を明らかにすること、また代議員を含めて社会全体が青年問題の重要性を認識し青年政策に関心を持っているとはいえないので、青年が国家建設には無くてはならない人材であり、特に青年政策が必要であると訴えることをコムソモールの方針とした。

しかし、コムソモール員から批判の多かった党のコムソモールに対する指導については、「コムソモールは党のパートナーではなく、予備員であると同時に協力員であり、コムソモールは党の路線に積極的に賛同する」との従来の見解を踏襲しただけであった。そして最後に「非公式団体」との関係に触れ、「社会組織との関係については20回大会後積極的に議論されてきた。中央委員会の今日の立場は以下の通りである。コムソモールはソビエト青年の前衛であるために言行で戦うが、一つあるいは幾つかの社会組織が青年の多様な利益の表出を独占することには反対する。コムソモールはペレストロイカを支持する統一戦線に加わり、ソ連憲法に反しない自主的社会組織の設立に参加する。」これが党協議会前のコムソモール中央委員会の最終的態度表明であった。

6月28日に開幕した第19回党協議会冒頭のゴルバチョフ書記長演説は、総論的にコムソモールの要求を満たす内容であった。ゴルバチョフは「政治システムにおける社会組織」の項でコムソモールと青年について触れ、青年層が強力なイニシアチブを発揮する社会層であり、イデオロギー教育だけではなく彼らに魅力的な生活条件を整えるための総合的青年政策が必要であると述べた。またコムソモールは青年の創造的イニシアチブを発揮する場であると同時に党の指導の下にある政治組織であること、しかし、党はコムソモールの自律性を保障すべきであることが強調された。これまでの党の見解を大きく超える新味さは無いものの、総合的青年政策の必要性が指摘された点はコムソモールにとって一步前進であった<sup>92)</sup>。

一方、協議会二日目に発言したミロネンコムソモール第一書記は、青年を取り巻く社会経済状況は依然厳しく青年層の中に緊張が生じていると指摘し、青年政策に青年自身が関与することを可能にするために最高ソビエトに青年の代表を確保すること、青年政策向けに特別資金を配分すること、懸案の青年法の制定を早急に行うことを求めたのである。

そして続けてコムソモールの立場と課題に触れ、コムソモールは如何なる組織でも青年の利益の表出を独占することに反対であることを確認した。最後に、現在のコムソモールは共産主義を青年に教育することも、青年の利益のために働くこともうまく機能していないと自戒して、今後コムソモールは青年のあらゆるイニシアチブを支持していく決意を表明して結んだのである。党協議会場の借りたコムソモールの所信表明演説ともいえる内容といえるだろう<sup>93)</sup>。

最終的に、草案には無かった青年についての条文が党協議会決議に盛り込まれることになった。ゴルバチョフの発言要旨を列挙した程度の内容であったが、それでもコムソモールにとっては青年組織として挽回を図るための得点として必要なものだったのである<sup>94)</sup>。とはいえコムソモールが20回大会以降、「非公式団体」との競合・協調関係を通じて模索してきたコムソモール再生の道筋は未だ不透明であり、すべてはこれからであった。

92) Комсомольская правда. 29 июня 1988.

93) Комсомольская правда. 30 июня 1988.

94) Комсомольская правда. 5 июля 1988; 8 июля 1988.

## 結びにかえて

「青年イニシアチブ・フォンド」や「青年住宅コンプレクス」などの運営に一応の成果を上げていることに自信を持ち、経済活動や娯楽・余暇の分野に本格的に取り組もうとするコムソモールであったが、すでに独占的な青年組織の地位を事実上解消されたコムソモールは、この分野の「非公式団体」の経験や人材を益々必要とするようになり、政治においては人民代議員選挙で「非公式団体」と青年の代表を巡り厳しく相争うことになる。

党協議会後に青年宮殿で行われた「どのようなコムソモールが我々に必要なのか」をテーマにしたディスカッションでは、「非公式団体」の隆盛でコムソモールが危機にあるという現状認識を土台にして、なぜコムソモールは「非公式団体」のようになれないのか、その理由は組織の設立目的がはっきりしないからであり、メンバーの関心がばらばらで会費を払っているだけであるからという意見が、コムソモールの市や地区の活動家から出された。コムソモールの学校と職場を単位とした中央集権的組織原則の見直し、「非公式団体」との対抗を経て身内からも公然と議論されるようになったのである<sup>95</sup>。党協議会後は、コムソモールが「非公式団体」を取り込んでいくのではなく、コムソモールが「非公式団体」の運動に取り込まれていく逆転現象がより顕著に見られるようになっていくのである。

本稿ではコムソモールと「非公式団体」との重層的相互関係を検討することで、ペレストロイカが始まったソ連で社会がどのように変容し、それに如何なる含意があったのかを探ることを試みた。その全体像と最終的結論を提示するには、本稿の対象を前期として、中期・後期を占める1988年後半からソ連崩壊までを丹念に辿る作業が不可欠である。

しかし、ここまでの中間考察で次のことが言えるだろう。時代の要請によって変革を迫られたコムソモールは、その変革の過程に党やコムソモール指導部のいわゆる「上から」の政策意図だけでなく、「下から」の変革のイニシアチブが錯綜する極めてダイナミックな場となった。そして漸進的改革志向とそれを凌駕しようとする急進的動向、それらが交わり衝突することによってもたらされる当初の意図を逸脱した成り行き、コムソモールと「非公式団体」の関係はこうしたソ連末期の社会の特徴を典型的に示しているということである。

そして、コムソモールは20回コムソモール大会以降の「非公式団体」との対抗・宥和関係を通じて、新たな活動路線と生き残りの戦略を迫られるようになったが、その一つの画期が第19回党協議会であったといえるだろう。党協議会において、コムソモールは青年層の利益表出をめぐる「非公式団体」と対等に競合していく姿勢を明確にしたのである。

1988年の後半以降「非公式団体」の運動形態は変化し、コムソモールと「非公式団体」の関係も次の段階に入る。人民代議員選挙に向けて人民戦線が形成された後、「非公式団体」は政党や社会活動団体あるいは経済事業へと分化していき、社会運動としての「非公式団体」の存在感は低下していくが、それぞれの組織や活動は新たな政治・社会の主体として、ソ連末期の無視できない変動要因となっていくのである。

この時期については、コムソモールを足場にこの時期展開した政治・社会・経済活動がコ

95 Какой комсомол нам нужен? // Молодой коммунист. 1988. №10.

ムソモールとベレストロイカの帰趨にどのように作用したのかが検討されねばならないだろう。特に、コムソモールが「非公式団体」を意識して青年層の利益を掲げて着手した経済活動は、コムソモールの変容過程ばかりでなく、市場経済導入に対する青年層のユーフォリアを理解する上で重要であると思われる。こうした作業は本稿を手掛かりに次に取り組むべき課題である。

## **Komsomol and Informal Organizations under Perestroika: Rivalry and Cooperation**

**MORI Miyako**

This paper focuses on the relationship between Komsomol and informal organizations under Perestroika. Perestroika brought immense social change to Soviet society. Komsomol had to face, for the first time in its long history, rival informal youth organizations not subordinate to, but independent of its power. An investigation of this new situation and analysis of the transformation of formal organizations like Komsomol sheds light on the transition and social change experienced during the final days of the Soviet system.

First, this paper will examine the appearance of various informal youth organizations under Perestroika, ranging from amateur hobby clubs to political groups. Simultaneously it will explore the tactics used by Komsomol to compete with them for support among young people and to survive in the new situation. This discussion will include an examination of the roles played by Komsomol and the informal youth organizations during Perestroika.

This paper focuses on the period from the 20th Komsomol Congress held in April, 1987 until June, 1988, when there were heated demands for democratization at the 19th Party Conference. It was in this period that the informal organizations not only played the most important role in promoting social change, but Komsomol also devised strategies to revive its role as a youth organization.

As background, we will trace the history of the relations between Komsomol and the informal youth organizations. At first, Komsomol had to take young people from traditional youth organizations in order to become the only formal youth organization in the Soviet system. Although Komsomol acquired this status in the late 1920s, there was an ongoing struggle to retain this monopoly in the face of continual attempts to create informal youth organizations.

In the 1970s, informal organizations of youth, mostly hobby clubs like rock music clubs became an essential part of life for ordinary young people. They enjoyed their leisure time in a subculture beyond the influence of Komsomol. These organizations were not directly anti-Soviet nor even politically oriented. Nevertheless, they were threatening to the authorities as potential enemies because they were making Soviet ideology less influential among the youth, the future-builders of Soviet society.

The renewed Cold War that broke out at the beginning of the 1980s made Komsomol confront a hard situation: how to protect Soviet youth from the evil subculture of the West. Under these circumstances, Komsomol adopted a new policy for informal organizations. That is, instead of suppressing all of them, Komsomol began to select “better” organizations both to promote and to keep under control the leisure activities of Soviet youth.

Second, this paper will examine this new Komsomol policy toward informal youth organizations. After Perestroika began, as society became more and more active, ideological restrictions rapidly weakened. Komsomol decided to “register” the informal youth hobby clubs and permit them to operate freely under its supervision. This new approach greatly increased the possibility both for cooperation and friction between Komsomol and the informal organizations.

In addition, new organizations appeared such as those protecting cultural assets or oth-



ers promoting ecological awareness. Further, youth groups involved in political discussions gradually emerged. These new organizations were considered the pioneers of Perestroika and were starting to rival Komsomol.

The 20th Komsomol Congress was the first opportunity to discuss the relationship between Komsomol and the emerging informal youth organizations. At this Congress, Komsomol declared that they could not become an alternative to Komsomol. It also tried to transform itself into a political organization to represent youth interests.

Third, this paper analyzes the politicization of the informal youth organizations in the spring just before the 19th Party Conference. At last, Komsomol recognized that it could not avoid talking on equal terms with the informal political organizations concerning the future of all youth organizations, including Komsomol itself. The informal organizations and Komsomol delegates met several times to discuss political problems in general and to make a joint appeal to the 19th Conference.

The 19th Conference was a very important venue for Komsomol to insure its role and status in the emerging system. After the discussions with the informal organizations, Komsomol devised a new strategy: It would become one of many youth organizations and it would cooperate with the others to advance Perestroika. Komsomol abandoned its earlier strategy of maintaining a monopoly over youth organizations. It realized that it could survive only if it became reconciled with the informal organizations that were more popular and more influential among the youth. To improve its image and survive, Komsomol would have to work in partnership with the other groups.

After the 20th Congress, a partnership was gradually established between Komsomol and the informal youth organizations in the area of leisure and cultural activities because such cooperation would serve to make Komsomol more popular. Ironically however, Komsomol was losing its organizational unity and identity as a youth organization due to its success in constructing a cooperative relationship with the informal organizations. In addition, after the 19th Conference, the search for a political partnership between Komsomol and the informal organizations became more difficult.

Under Perestroika, Komsomol had to transform itself in order to compete with the informal organizations. This transformation process and the evolving relationship between Komsomol and the informal youth organizations are ongoing. They are a topic for future research on the role of Komsomol under Perestroika.